

区分2

戦略的創造研究推進事業  
(社会技術研究開発)  
平成28年度研究開発実施報告書

「持続可能な多世代共創社会のデザイン」  
研究開発領域

研究開発プロジェクト  
「未病に取り組む多世代共創コミュニティの  
形成と有効性検証」

研究代表者 渡辺 賢治  
慶應義塾大学環境情報学部 教授

## 目次

1. 研究開発プロジェクト名 .....	2
2. 研究開発実施の要約 .....	2
2 - 1. 研究開発目標 .....	2
2 - 2. 実施項目・内容 .....	2
2 - 3. 主な結果 .....	2
3. 研究開発実施の具体的内容 .....	4
3 - 1. 研究開発目標 .....	4
3 - 2. ロジックモデル .....	6
4. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況 .....	36
5. 研究開発実施体制 .....	37
6. 研究開発実施者 .....	39
7. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など .....	41
7 - 1. シンポジウム等 .....	41
7 - 2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など .....	42
7 - 3. 論文発表 .....	42
7 - 4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表） .....	42
7 - 5. 新聞報道・投稿、受賞等 .....	43
7 - 6. 知財出願 .....	43

## 1. 研究開発プロジェクト名

未病に取り組む多世代共創コミュニティの形成と有効性検証

## 2. 研究開発実施の要約

本プロジェクトでは、多世代が協働し、住民が生涯にわたって「未病対策」に取り組むまちづくりプラットフォームを神奈川県西地域（湯河原町）をフィールドとして開発し、未病に取り組む多世代コミュニティを全国展開することが中・長期的目標である。

こうした多世代コミュニティが未病に対してどのように効果をもたらすのかを検証するために、健康状態をモニターする指標の作成とともに、多世代ソーシャルキャピタル指標、生きがい指標などの新規指標を作成し、多世代コミュニティが健康状態にどのような効果をもたらすのかを検証するモデルを作成することを期間内の目標とする。

### 2 - 1. 研究開発目標

本プロジェクトでは、多世代が協働し、住民が生涯にわたって「未病対策」に取り組むまちづくりプラットフォームを神奈川県西地域（湯河原町）をフィールドとして開発し、未病に取り組む多世代コミュニティを全国展開することが中・長期的目標である。

こうした多世代コミュニティが未病に対してどのように効果をもたらすのかを検証するために、健康状態をモニターする指標の作成とともに、多世代ソーシャルキャピタル指標、生きがい指標などの新規指標を作成し、多世代コミュニティが健康状態にどのような効果をもたらすのかを検証するモデルを作成することを期間内の目標とする。

### 2 - 2. 実施項目・内容

「未病」とは、ライフロングに生まれてから死に至るまでの間、健康状態から病気、介護に至るといった幅広い概念である。よって「未病対策」は疾病の「予防医療」や健康状態を向上させる「健康増進」に止まらず、病気や要介護状態となった後の進展予防も含む概念である。本プロジェクトは多世代が協働して未病対策を行うことを目標としている。

平成 27 年度は未病概念の浸透、多世代地域コミュニティの形成、地域ネットワーク形成の条件調査、要介護度進展予防のための調査、地域資源である温泉を活用した変形性膝関節症の悪化予防について検討を行った。

また、本プロジェクトの評価をするための、指標作成を行った。

### 2 - 3. 主な結果

まずは本プロジェクトの普及・浸透を図るために、ポスターを各所に貼ってもらったことに加え、何故未病が必要なのかを行政・区長に理解してもらうことから開始した。今後は広報等で幅広く浸透させることにした。

多世代コミュニティ形成のために、1) ふるさと絵屏風プロジェクト、2) 多世代の居場所づくり、3) 演劇ワークショップを進めた。そこに参加する住民の変化について自覚的および他覚的調査を行った。

要介護度進展予防は、すでに要介護を受けている住民が、家族と同居か独居か、施設入居か否かにより、どのような影響を受けるのかをさまざまな観点から調査を行い、社会的

要因が要介護者にどのような身体的・精神的制約を加えているかについて明らかにした。

地域資源である温泉を用いた未病対策として温泉泥（ファンゴ）を用いて膝の痛みが取れるかどうかを検討中である。

多世代の評価指標としては、他人との関係性と精神的安定性について、湯河原町住民ならびに地域小中学生を対象に解析を行い、同世代および世代を超えた関係が、よりある者の方が生きがいのあることが明らかになった。

### 3. 研究開発実施の具体的内容

#### 3 - 1. 研究開発目標

「未病」とは、ライフロングに生まれてから死に至るまでの間、健康状態から病気、介護に至るという幅広い概念である。よって「未病対策」は疾病の「予防医療」や健康状態を向上させる「健康増進」に止まらず、病気や要介護状態となった後の進展予防をも含む概念である。

未病対策には運動、食事、社会参加が重要であることが指摘されているが、これらを推進するためには個の努力によるものだけでは不十分であり、コミュニティがそれを支援することが重要である。社会参加は言うまでもなく、運動も歩きやすい道の整備が不可欠である。

本プロジェクトでは、多世代が協働し、住民が生涯にわたって「未病対策」に取り組むまちづくりプラットフォームを神奈川県（湯河原町）をフィールドとして開発し、未病に取り組む多世代コミュニティを全国展開することが中・長期的目標である。

こうした多世代コミュニティが未病に対してどのように効果をもたらすのかを検証するために、健康状態をモニターする指標の作成とともに、多世代ソーシャルキャピタル指標、生きがい指標などの新規指標を作成し、多世代コミュニティが健康状態にどのような効果をもたらすのかを検証するモデルを作成することを期間内の目標とする。

#### (1) 全体目標およびリサーチ・クエスチョン

1. 多世代関係は生きがい・レジリエンス・心身の健康・行動にどのような影響を及ぼすか？
2. 多世代共創の「場」や「活動」は、個人や人々の関係性、地域にどのような影響を与えるか？
3. 社会的介入により要介護度進展予防は可能か？
4. 地域資源としての温泉を活用して寝たきり予防は可能か？

#### (2) 今年度の目標

- 行政との連携の強化
- 多世代共創のためのふるさと絵屏風作成
- 多世代居場所の創設
- 多世代参加健康演劇
- 要介護度進展予防に対する社会参加の検証
- 地域資源である温泉を用いた未病改善の検証
- 多世代健康教育
- 未病改善アプリの開発
- 多世代交流指標の開発と未病評価との関連性の検証

### (3) 背景

地域が既に限界集落から消滅集落へとさしかかっている中、今後人口の多い首都圏で急速に進行することが予測される少子高齢化の問題は、日本全体の医療費・介護費の増大に対して大きな影響を及ぼし、日本の経済基盤そのものを揺るがすことが懸念されている。

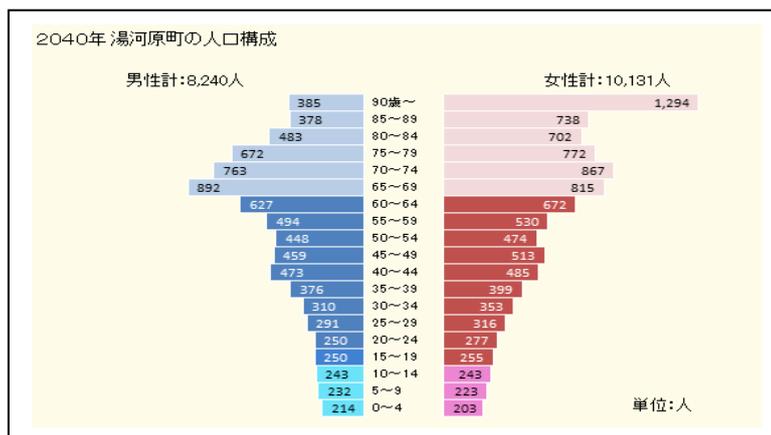
そこで重要なことは、如何に病気にならないかということである。「未病」という概念は、単に病気の予防のみならず、健康増進まで含めた生涯にわたる概念である。

神奈川県では将来に対する備えとして、「未病を治すかながわ宣言」をし、いち早く未病対策に取り組んでいる。神奈川県の高齢化率は、まだ全国平均よりも低いですが、団塊の世代や高度成長期に県に転入してきた世代の高齢化が進行するため、今では全国平均を上回るスピードで超高齢社会へ移行しつつある。

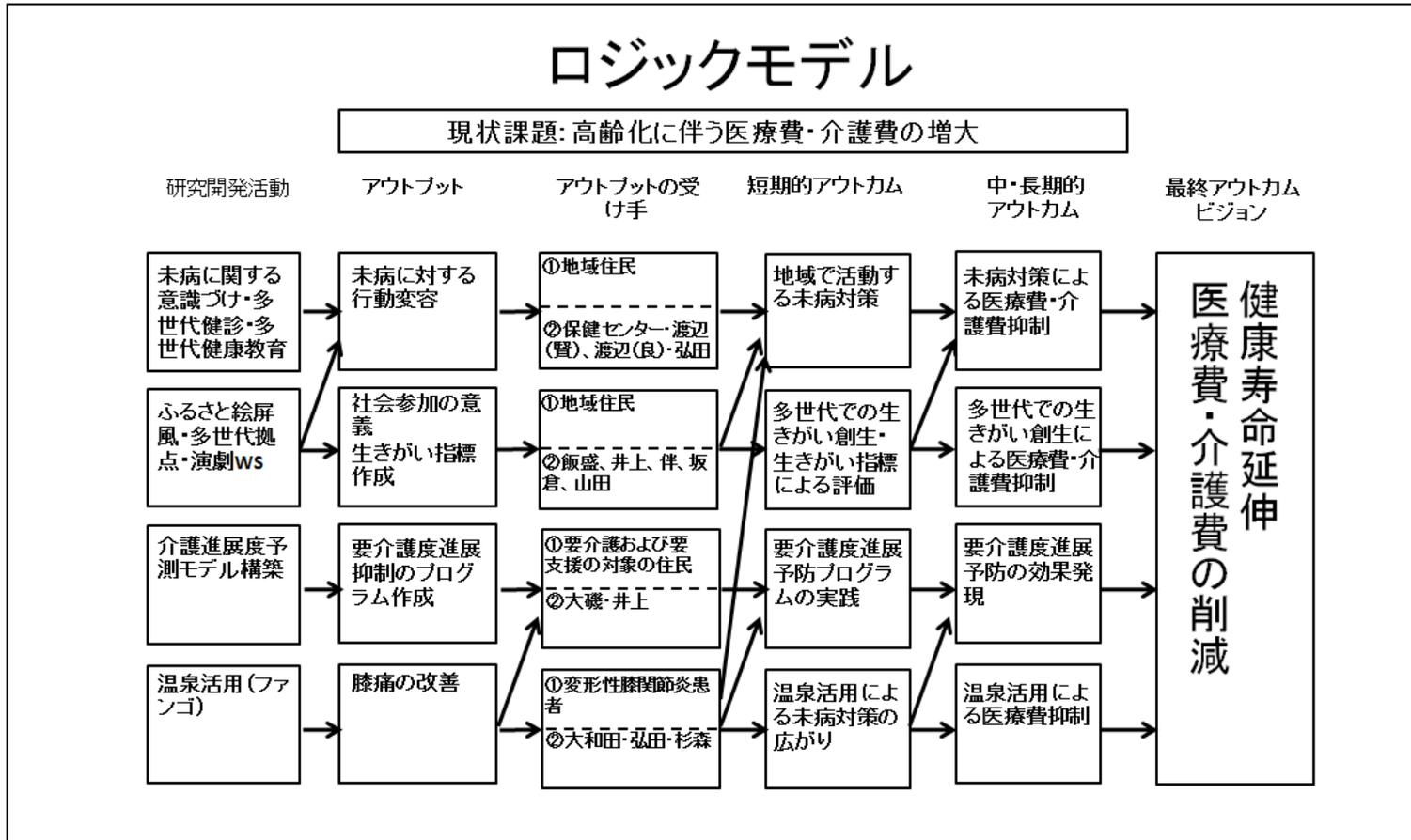
本プロジェクトのフィールドである湯河原町の高齢化率は2016年現在38%であるが、2040年には48%に達すると予想されている。

未病の改善には「食」「運動」「社会参加」の3つが重要である。「食」「運動」は個人の努力によるところが大きいですが、「社会参加」については多世代共創社会で育んでいくことで、世代を超えた生きがい創生が可能だと考えている。

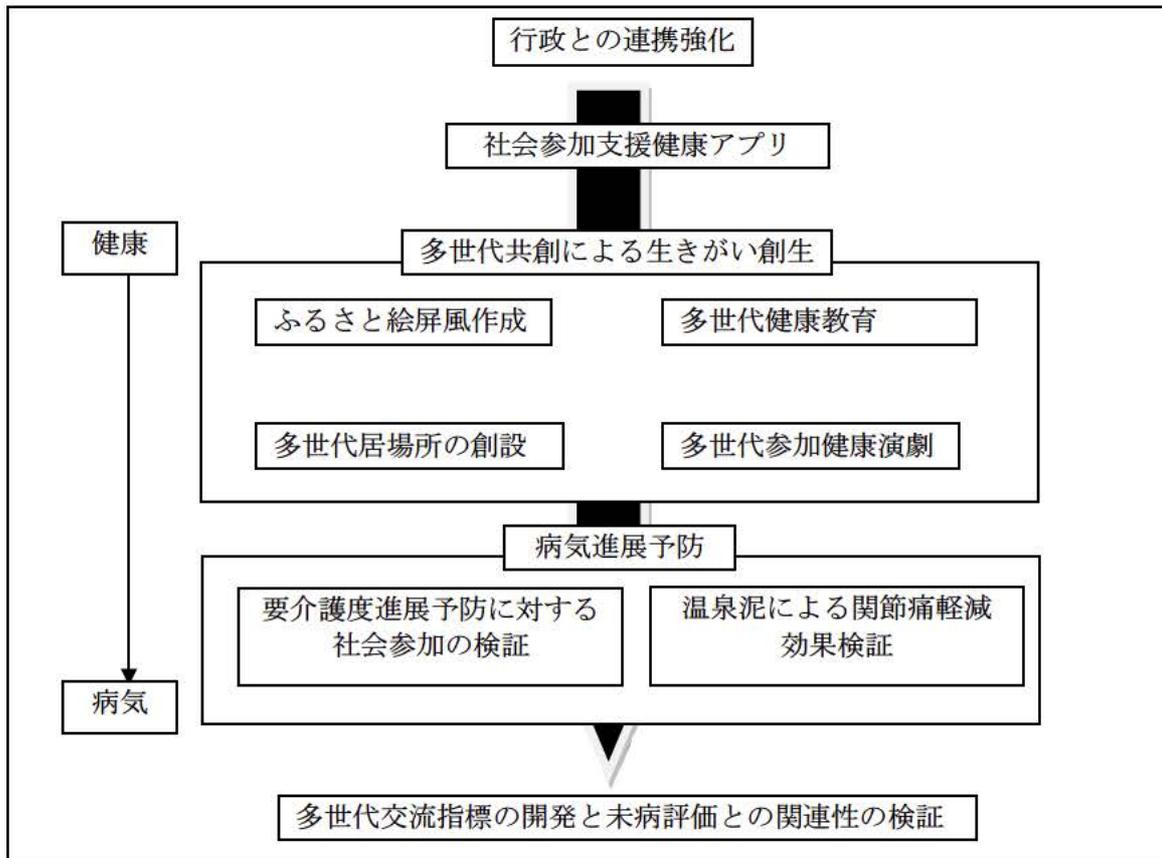
しかし、「食」「運動」の研究は多数あるのに対し、多世代の社会参加が「未病」にどのような影響を及ぼすのかについての検証はない。そこで、本プロジェクトでは多世代コミュニティ形成が生きがいを中心とした未病改善にどのような影響を及ぼすのかを検証する。



3 - 2. ロジックモデル



### 3-3. 実施方法・実施内容



#### ◆ 1. プロジェクトへの町の取り組みの推進

本プロジェクトが終了した後も持続的な活動が継続するためには、行政の関与と住民の参加が不可欠である。地域創生ではトップダウンか、ボトムアップかという議論をよくするが、結論から言えばどちらも必要であろう。

平成 28 年度は多世代拠点のリノベーションを行ったが、子どもたちに加え、近隣の住民が手伝ってくれた。しかしそこで言われたことは「町は関与しているか」という言葉であった。「町が関与していればわれわれも積極的に手伝える」ということであった。

地域によって異なるかもしれないが、行政のお墨付きがあるかどうかは非常に重要な鍵となることを実感した。

一方で、種々の活動は地域住民の力がなければ何も成し得ないのは、行政もよく分かっている、11 ある地区区長さんと老人会には事あるごとに連携を図るように配慮してくれた。絵屏風作成に当たっては、老人会ならびに各地区の協力なしには成し得なかった。

その意味において、今年度 8 月 17 日付けで、平成 26 年 11 月の開始時点から平成 29 年 11 月までの本プロジェクト全期間のすべての活動に対して町が共催してくれることになったのは大きかった。

絵屏風のお披露目、多世代拠点の開所式などには町長はじめ、社会教育課長など担当する関係課の方が参加してくれたのは、大きな一歩であった。

#### ◆ 2. 絵屏風プロジェクト

絵屏風プロジェクトは、地域の生活誌を地域住民の参加と共同作業によって「ふるさと

絵屏風」と称する絵画作品として描き上げることによって、持続可能な多世代共創社会の形成に資する知見を得るとともに、そのプロセスにおいて対象地域内の多世代のつながりを構築し、絵図完成後はそのつながりを踏まえた活用を通じて高齢者の生きがいづくり、郷土教育と文化継承、地域・観光資源開発をはじめとするまちづくりへの展開につなげていくことを目指すプロジェクトである。「心象図法」と呼ばれる手法を採用し進めており、概ね以下の段階を踏む。

- (1) 地域住民（とくに高齢者）を対象にした五感体験アンケート
- (2) 五感体験アンケートの結果を踏まえた聞き取り調査
- (3) 五感体験アンケート及び聞き取り結果を踏まえた絵図の制作
- (4) 制作した絵図の活用

昨年度までに上記（2）の段階まで進んでおり、今年度は（3）絵図の制作を中心に進め、（4）の活用に向けた布石と活用の試行までを行うこととした。

プロジェクト実施にあたっては前年度同様地域政策課及び介護課を中心に湯河原町の協力を得、また各区会・老人会や湯河原美術協会の協力により進めた。

この方法の眼目は地域住民自身が主体的に、互いに協働して作品の制作に取り組むことにある。湯河原美術協会が選抜された会員による絵図制作チームを結成されたことから、今年度は、イ）この絵図制作チームへの指導・助言を行うこと（全期間）、ロ）制作チームと各老人クラブ・語り部との協働・共創の場をデザインすること（期間中盤～後半）、およびハ）絵図を介した多世代の交流とつながり形成を目的としたイベント・ワークショップを企画・開催すること（同後半）、ニ）その過程を観察・記録すること（全期間）を方法として、初期の目的の達成を目指した。

### ◆ 3. 多世代拠点づくり

平成 28 年度は、多世代拠点のリノベーション、多世代拠点の運営をスタートさせた。子どもからお年寄りまで、地域の方々と共にリノベーションを実施し、拠点づくりの段階から多世代を巻き込み、多くの方々が拠点への愛着をもてるよう、ワークショップをデザインし、実践した。11 月のオープン時に多世代拠点をあえて未完成（拠点の名前が決定していないなど）のままにし、オープン後にも多くの地域の方々が参画し、共に育てていけるようなスペースを用意し、未完成だからこそ生まれる場、交流を期待した。

オープン後の運営では、地域サポーターの方にも入っていただきながら、平日は 14:00-17:00、土日は 10:00-17:00、月に 10 日間ほどをオープンし、11 月～3 月までの間にのべ 700 人以上の方が場を訪問し、多世代での交流の場が生まれた。1 人 1 人が安心して過ごせる場を目指すため、毎日の場では、チェックイン・チェックアウトという、今、感じていることを場にきているメンバーで共有する時間を設け、多世代でいま感じていること、悩んでいることなどを共有できる、共有しやすい環境を意図的にデザインし、運営している。

### ◆ 4. 演劇ワークショップ

平成 28 年度は、第 2 回ゆがわら多世代ふれあい劇場として、平成 27 年度に引き続き 4 回の演劇ワークショップを開催した。平成 27 年度の成果により、即興を伴う演劇の創作・発表活動を通して、交流の少ない多世代が出会い、相互理解、受容、尊重、承認を体験し、最終的に結束や親密さ、励みが生まれることが示唆されており、持続可能な多世代コミュニティづくりにおいて有用であると考えられているため、継続・発展を目標とした。

「ゆがわら多世代ふれあい劇場」では、演劇の手法を用い、多世代の住民による学び合いを行うもので、はじめの 3 回でコミュニケーションゲームやお芝居作り、4 回目には創

作したお芝居の発表を行う。演劇ワークショップとは、俳優のファシリテーションのもと、参加者が短いお芝居を創作し即興を交えて演じるという活動で、学校や職場のコミュニケーション教育などで用いられている。ワークショップ参加者に事後インタビューを実施し、どのような変化や気づきがあったかについてたずね、その内容を分析した。

平成 28 年度は前年度の課題となった若い世代を取り込むための対策として、教育委員会と連携し、湯河原町内の小・中学校に参加募集のチラシを配布した。また、住民間の基盤づくりを強化するために、キーパーソンとなる町内の劇団代表にもワークショップへの参加を働きかけた。

#### ◆ 5. 要介護度進展の予測および介入・評価

前年度までに実施した聞き取り式の質問紙調査をもとに、平成 28 年度は、前向きに観察調査を行うこと、本プロジェクト終了後も継続して調査が継続できるよう、調査対象となる高齢者介護福祉施設と交渉を同時に進めた結果、湯河原老人ホームとシーサイド湯河原の 2 施設において了承が得られた。

両施設における電子カルテシステムとの整合性、個人情報漏洩リスク対策を行い、平成 28 年 9 月より湯河原老人ホームとシーサイド湯河原の 2 施設における入所者を対象とした経時的データの集積が開始された。集積データは、①高齢者基本チェックリスト 25 項目、②対人関係・認知症・寝たきり・APDL（生活関連動作）・及び家族構成等の評価、③バイタル（体温、血圧、脈拍、呼吸数、SpO<sub>2</sub>（経費的動脈血酸素飽和度）等）等である。2 施設職員に対して、PLR（分散型デジタル管理システム）による上記データを、2 ヶ月に一回入力を依頼し、現在集積中である。2 施設の職員とは、2 ヶ月に一度、湯河原老人ホームで P L R ミーティングを行っている。

本調査と並行して、湯河原在住の 65 歳以上の高齢者を対象にした交通手段と、外出行動の郵送による質問紙調査、本プロジェクトの他プログラム参加者を対象としたプログラム間の相関を評価する調査を行った。後者の調査は、平成 28 年 8 月に湯河原町にて合宿を行い、湯河原町民を対象とした街頭アンケートを実施した。その結果を平成 28 年 10 月に行われた第 75 回日本公衆衛生学会総会において口演発表した（2 演題）。

また、第 66 回日本病院学会において、前年度までのプレ調査及び本調査を用いた解析結果について口演発表した（2 演題）。

#### ◆ 6. 温泉泥の関節痛に対する効果の検証

軽度の変形性膝関節症の温泉泥による軽減効果を実施するため、湯河原在住の町民に対し、ひざ関節の痛みが軽減するかクロスオーバースタディーで評価する実験を計画した。

##### 6-1 評価項目

主要評価項目として CS-30 を利用。副次的評価項目として歩行速度 (TUG) ・痛みに関する質問 (VAS) 、NPO 健康医療評価機構の SF-36 の質問・自律神経バランス・末梢血抗酸化蛋白質測定・簡易型唾液アミラーゼを実施することとした。

##### 6-2 実験方法

ひざ関節に痛みのある 50 歳～80 歳の軽度の変形性ひざ関節症の方を湯河原病院の紹介によって、40 人リクルートする。次に、A 群：温泉泥先群 20 人、B 群：通常治療先群 20 人の 2 群にランダムに分ける（層別無作為化）。

(ア) 温泉泥治療方法：参加者は 8 日間で 3 回（1、4、8 日目）温泉泥施術を実施する。（1 回あたり 20 分）。毎回、施術前と施術後には、血圧と脈拍を測定する。（体調が悪い時には、中止する）。また自己採血（凝固剤はヘパリン）約 50  $\mu$ L おこなう。温泉泥施術は、訓練された有資格者が実施する。まず、ベッドの上につぶせになり、温泉泥（重さ約 10Kg、温度 45 度）をひざ、腰、肩に厚さ 1～2 cm の厚みでのせる。次に、冷め

ないように専用の毛布で全身を覆う。施術者は数分ごとに、参加者の体調を尋ねたり冷えたタオルで額の汗をぬぐうなどのケアを行う。20分後施術を終了し、シャワーで泥を洗い流す。すぐに各種測定をおこなう。以上の施術を1回とする。施術1回目の直前(1日目)と施術3回目の翌日(9日目)に歩行速度(TUG)・痛みに関する質問(VAS)、NPO健康医療評価機構のSF-36の質問・自律神経バランスを上記測定項目に追加しておこなう。

(イ) 通常治療方法：参加者は8日間、かかりつけである湯河原病院整形外科医の指示通りの治療を継続する。治療の種類は、NSAIDS やアセトアミノフェン・湿布薬などである。

1、4、8日目に血圧と脈拍の測定および自己採血をおこなう。1日目と9日目にCS-30、歩行速度(TUG)・痛みに関する質問(VAS)、NPO健康医療評価機構のSF-36の質問・自律神経バランスの測定をおこなう。

(ウ) 温泉泥施術と通常治療の間はWashout期間として1週間あける。通常治療と温泉泥施術との間も1週間あける。

温泉泥施術期間中は、NSAIDS やアセトアミノフェン・湿布薬などの投薬を中止しない。

(エ) 情報の収集および解析について  
測定データは、2X2分散分析で各種データの平均値について、A群における温泉泥施術 vs 通常治療の有意差検定とB群における温泉泥治療 vs 通常治療の有意差検定をおこなう。さらに、A群での改善率とB群での改善率の比較を比較する。

本研究の仮説として、

□A群・B群ともに温泉泥施術の方が通常治療よりも主要評価項目の改善効果が高い。

□温泉泥施術の効果が残っている場合には、A群における通常治療効果は、B群の通常治療効果よりも評価項目の改善効果が高い。

(オ) 研究協力施設(大観荘)にて収集された情報については、専用の暗号化USBメモリーを用いて抽出された後、慶應義塾大学環境情報学部のデータ解析担当者データ解析担当者へ送られる。

集められた情報については、連結可能匿名化処理を施された後、データ解析担当者(高知大・東邦大)にて解析される。

### 6-3 研究期間

研究期間：平成27年4月～平成29年9月末

### 6-4 方法及び内容についての変更

慶應義塾大学総合政策学部、環境情報学部、政策・メディア研究科における実験・調査倫理委員会の承認を受け、湯河原病院より被験者の紹介を受けるという形式をとっていたが、病院による被験者の認定がハードルとなり、平成28年5月末時点での被験者数は4名にとどまっていた。また実験実施場所として予定していた湯河原温泉旅館・大観荘が5月末で閉鎖したことを受け、実施場所についても再考する必要が生じた。実施場所については、湯河原町と協議を進め新たな場所を検討・決定していくことになった(3-4 今年度の進捗・成果参照)。

方法及び内容についての変更点は、下記の通りである。以下の変更点については慶應義塾大学総合政策学部、環境情報学部、政策・メディア研究科における実験・調査倫理委員会に対し修正変更を申し出(平成28年12月26日)、承認を得た(平成29年1月18日)。

- ① 被験者の対象年齢 50歳～80歳を50歳～85歳とする。
- ② 被験者を湯河原病院の患者に限定せず、他病院やクリニック、接骨院等で受けた「軽度の変形性ひざ関節症」の診断を含め、整形外科受診患者を対象を拡大する。
- ③ 被験者の要件にあった、単純X線写真のグレードのしばりをなくす。
- ④ 温泉泥経験者も対象とする。
- ⑤ 研究協力施設を大観荘に限定せず、その他の施設も含める(申請時点ではまだこ

ごめの湯に確定していなかったため、施設名の限定を避けた)。

## ◆ 7. 多世代健康教育

多世代で未病に取り組む活動の一環として、世代を超えた伝承を特徴とした多世代健康教育を実施した。湯河原町内では子どもの肥満等が課題となっていることから教育目標は「咀嚼の重要性に関する知識習得と食習慣の定着」とした。

### 7.1 健康教育

研究対象は湯河原町立東台福浦小学校の5年生1クラスの在籍者全員(約20人)である。

多世代健康教育に先立って、平成28年9月15日には大学生との交流を実施し、ゲームをするなどして関係性を深めた。その上で10月27日と11月21日に、大学生をファシリテーターとした45分間の授業を2回実施した。授業は大学生と小学生混成メンバー間でのグループ討議や、アクションプランの作成などを含み、能動的に学ぶことを特徴とした内容である。授業の内容を下に示す。

更に平成28年12月14日の学習発表会において、子どもたちが保護者及び併設の保育園の幼児に向けた健康教育を発表した。一連の介入を通じ、世代を超えて知識が伝承される流れを作り、研究対象が受け手のみならず、送り手としての役割を担うように設計した。

尚、平成29年2月24日には、健康教育の結果について大学生から小学生にフィードバックを行った。

#### 【第1回目授業】主題：「よく噛んで食べる重要性の知識習得と理解」

- ① イントロダクション：大学生と生徒の間の心理的な壁をさらに低くする。
- ② 知識の共有：次に、グループに分かれて、すでに知っている知識を出してもらって、知識やふだんどんな食事をしているかなどの情報を共有する。
- ③ 実践：続いてよく噛むことの重要性を体感してもらう。干し芋を噛み、何回でどのように味が変わったかプリントに記入してもらい、グループ内で話し合う。
- ④ 目標決め：毎日の給食の時によく噛んでもらうことを実践・習慣化してもらうために、「給食の一口目は30回以上咀嚼する」を約束する。そして、毎日の給食時にカードにできたか、できなかったかをチェックするための「噛み噛みカード」を作成する。

#### 【第2回目授業】

- ① イントロダクション：知識の定着や実践状況の把握
- ② グループワーク：グループに分かれて1ヶ月実践した感想を述べ合い、情報を共有する。
  - 児童に学習発表会で学習内容やその後実践したことを発表してもらう。
  - 食育の授業および学習発表会への参加は小学校の授業・行事の一環として実施する。

### 7.2 質問紙調査

咀嚼行動や野菜の摂取などの食生活の知識・習慣を問う質問紙調査を、介入前、第1回授業後、学習発表会後に実施した。

### 7.3 咀嚼回数測定

介入により咀嚼回数の増加が認められるか否かを検証するため、介入前と学習発表会終了後に咀嚼回数計測器「かみかみセンサー」を用いた咀嚼回数測定をおこなった。「かみかみセンサー」はあごの咀嚼運動をとらえて、噛む回数をカウントする装置である。

#### 7.4 咀嚼力の測定

介入により咀嚼力の改善が認められるか否かを検証するため、介入前と学習発表会終了後 1 月以内に咀嚼力判定ガムを用いた咀嚼力の測定をおこなった。

#### 7.5 結果とフィードバック

介入前後の咀嚼回数について t 検定を行った結果、介入前 1175.45 回、介入後 1390.95 回で 5%水準で有意に噛む回数が増えていた。また咀嚼力については、咀嚼力判定ガムの a-f の順序尺度を、数 1-6（数値が大きい方が噛む力が強い）の数値に置き換えて t 検定を実施したところ、介入前 4.85、介入後 5.1 となり、介入後が 5%水準で有意に咀嚼力が高かった。質問紙調査の結果については検証中である。

多世代教育の場では、大学生の来校を楽しみにする子どもの姿が見られた。フィードバックの時には大学生の名前を覚え、声を掛ける姿が見られた。また、交流や食育の後は、毎回大学生と小学生が共に給食を食する時間を設けた。好き嫌が多く牛乳が飲めなかった児童が、大学生がいるときには全部飲んだり、嫌いな野菜を残さずに食べたりという姿が見られた。

### ◆ 8. 多世代健康診断

高知県黒潮町で施行している多世代健康診断を湯河原の町営温泉場であるごごめの湯で行うように計画したが、町役場ならびに保健センターとの調整がつかず、実行には至らなかった。

### ◆ 9. 未病の評価法の検討

平成 27 年度に収集した「湯河原多世代アンケート」「ゆがわらっこ人とのつながりについてのアンケート」「湯河原町 地域活動と多世代交流についてのアンケート」のデータを元に、尺度の信頼性・妥当性を検証する。項目の取捨選択を行い、より質の高い尺度を構築するよう解析を進めた。

湯河原町の 20 歳以上の住民 1200 名を無作為抽出して郵送にてお願いした「ゆがわらっこ人とのつながりについてのアンケート」（回答数 732 名。有効回答数 394 件（有効回答率 19.7%）。女性 62.4%、男性 36.8%。平均年齢 55.77 歳（S.D. 14.60）。）では多世代交流のある人の方が、生きがいが高いことが分かった。また、65 歳以上で働いている人は働いていない人に比べて生きがいが高いが、働いている人の中では、常勤よりも非常勤の人の方が、生きがいが高いことが分かった。

解析は現在も続いており、平成 29 年度にはすべての解析を終了する予定である。

### ◆ 10. ライフログアプリ作成とコミュニティ形成アプリ

湯河原町でもコミュニティの重要性は認識しており、平成 28 年度は町で活動するコミュニティを把握し、紹介冊子を作成することを目指して活動した。平成 27 年度に作成した「クチコミュ・湯河原」サイトとの連携を図るべく、湯河原町地域振興課と話し合いを進めた。町の最終成果物ができた後で、相互リンクに関しての話し合いを進める。

また、ライフログアプリとして、食・運動・服薬に加えて、「人と会話したか」という項目を設けて他人との交流の度合いを測るアプリを作成した。

健康増進計画でも高齢者の孤立化を防ぐために、「スマホの使い方講座の開催」が掲げられている。ライフログアプリ作成とコミュニティ形成アプリの活用については、地域振興課、保健センター、商工会などと話し合いを進める予定である。

## 3 - 4. 研究開発結果・成果

### (1) 明らかになったこと

◆ 1. 持続可能な社会の実現にとって、どのような多代的なアプローチが有効か？  
どのような問題に何故有効なのか？

世代をつなぐ際に子どもを中心に据えることで、次世代の町の発展のために大人たちが動き始めることが分かった。また、子どもたちは大学生が大好きで、子どもと大学生の交流が核となってコミュニティが動くことが分かった。

◆ 2. 特に若い世代（子供、学生、若年単身者、子育て世代等）にとって、多世代共創的活動に参加するためのインセンティブにはどのようなものが考えられるか？

ふるさと絵屏風を通じて高齢者が語ることは若者や子どもたちにとって新鮮であり、ふるさとを見直すきっかけとなった。

◆ 3. 持続可能な社会の実現にとって効果があると思われる多世代共創的活動の中で、一部の世代に十分なインセンティブがないことが障壁となっている場合、参加を促すために、どのような制度設計が考えられるか？

10 代後半から 20 代は町にいないので、空白の年代として今後も課題である。

◆ 4. 多世代共創的活動は人々の意識にどのような変化をもたらすか？そのような意識変化は持続可能な社会の実現にとってどのような含意があるか？

時代を超えた交流が、実際に持続可能な社会の実現につながるかどうかは引き続きの課題である。

## (2) 今年度の進捗・成果

### ◆ 1. プロジェクトへの町の取り組みの推進

本プロジェクトが終了した後も持続的な活動が継続するためには、行政の関与と住民の参加が不可欠である。地域創生ではトップダウンか、ボトムアップかという議論をよくするが、結論から言えばどちらも必要であろう。

平成 28 年度は多世代拠点のリノベーションを行ったが、子どもたちに加え、近隣の住民が手伝ってくれた。しかしそこで言われたことは「町は関与しているか」という言葉であった。「町が関与していればわれわれも積極的に手伝える」ということであった。

地域によって異なるかもしれないが、行政のお墨付きがあるかどうかは非常に重要な鍵となることを実感した。

一方で、種々の活動は地域住民の力がなければ何も成し得ないのは、行政もよく分かっていて、11 ある地区の区長と老人会には、事あるごとに連携を図るように配慮してくれた。絵屏風作成に当たっては、老人会ならびに各地区の協力なしには成し得なかった。

その意味において、今年度 8 月 17 日付けで、平成 26 年 11 月の開始時点から平成 29 年 11 月までの本プロジェクト全期間のすべての活動に対して町が共催してくれることになったのは大きかった。

絵屏風のお披露目、多世代拠点の開所式に、町長はじめ社会教育課長など担当する関係課の方が参加してくれたのは、大きな一歩であった。

### ◆ 2. 絵屏風プロジェクト

平成 28 年度は 1 年かけて「湯河原ふるさと絵屏風」の制作に取り組み、1 月までに完成

をみた（図 1）。制作の全期間にわたって、共催団体となった湯河原町はもとより、各町会・老人クラブの協力を得ることができた。特に老人クラブにおいては、地区ごとに採用するエピソードの選定作業、絵屏風の内容の監修、進捗報告を兼ねた多世代交流イベント開催など、制作の要所要所で非常に積極的かつ主体的に参加・協力して頂いた。実際の制作は、湯河原美術協会有志メンバーの共同作業により進めた。制作場所として湯河原町教育センター内の一室を約半年にわたって提供頂いた。こうした制作プロセスを共有・経験することで、各関係者に当事者意識が醸成され、皆で一枚の絵図を「共創」という状況を生み出すことができた。

完成した絵図は、2月5日に町長参列のもと、お披露目の式典を行った後、町会・老人クラブなど地域団体や小中学校などの関係機関に向けた披露・報告を行った。マスコミ各社による報道を通じて、当プロジェクトおよび絵図について一般に広く紹介・周知することができた。

また、「多世代の居場所」の活動との連携を進め、2月には居場所を会場に子供たちと高齢者の語り部による多世代交流イベント（「絵解きの会」）を実施した。

こうした機会を重ねるうちに、老人会メンバーのなかに、「語り部」として意欲的に参加する人も現れてきた。ふるさと絵屏風複製品を制作し、絵屏風の社会実装、地域での活用の準備が整った。



図 1. 湯河原ふるさと絵屏風

表 1. 平成 28 年度絵屏風プロジェクト調査・活動実施経過

時期	内容	作業主体・対象
4月-5月	地区ごと「地域マンドラ」づくり	慶應義塾大学学生
4月-8月	地区ごとエピソード選定	各地区老人クラブ
7月-11月	下絵制作	湯河原美術協会／各地区老人クラブ
11月5日	多世代交流イベント	各地区老人クラブ／小学生・保護者 ／湯河原美術協会／湯河原町／慶應義塾大学学生

1 1 月 - 1 2 月	本図制作 (12 月 14 日完成)	各地区老人クラブ／湯河原美術協会 ／湯河原町／慶應義塾大学学生
1 月 2 0 日	絵屏風完成	
1 月 - 3 月	絵屏風活用試行	各地区町会／各地区老人クラブ／湯 河原美術協会／湯河原町／小学生／ 慶應義塾大学学生／居場所プロジェ クトチーム

絵屏風の制作は「心象図法」の手順に沿って、以下のように進め、それぞれの局面で成果を得た。

【地域体験マンダラづくり】

「五感体験アンケート」及び聞き取り調査で採取した地域の暮らしに関するエピソードを、KJ法を援用して整理分類し、イラストなどを描き加えて模式的にマップ化する「地域体験マンダラ」を、対象地区ごとに制作した(図2)。作業は慶應義塾大学渡辺研究会の学生が行った。「地域体験マンダラ」は地域の生活誌のなりたちを可視化、図式化したもので、絵屏風の構想や構図を検討するための基礎となる。

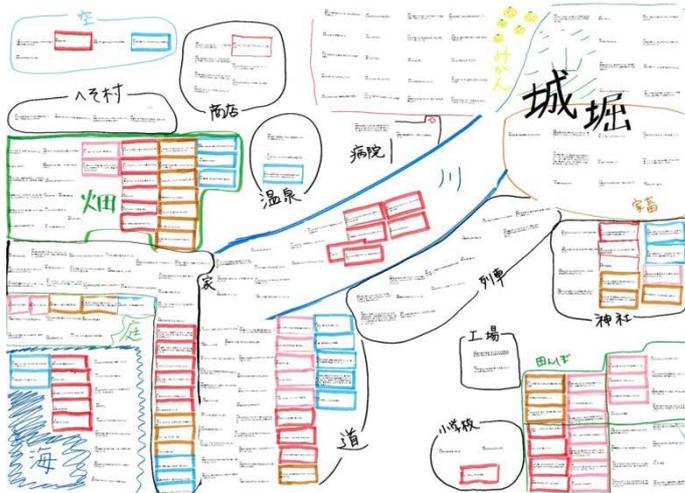


図2. 地域マンダラ作例

【地区ごとエピソード選定】

作成した「地域体験マンダラ」及びエピソードを一覧にした冊子を各地区老人クラブに対して配布し、ふるさと絵屏風に採用したいエピソードについて、地区ごとに最大10まで選定してもらった(図3)。選考の仕方は各老人クラブの裁量にまかせたが、各地区少なくとも数百あるエピソードの中から10までに絞り込むために、何を取るべきか、すなわち何を次代に伝えたいのか、何が当該地区の特徴なのか、といった観点から、老人クラブのメンバーや地域の住民同士が取捨選択のための協議・検討をすることになる。この選定のプロセスは、地域住民が自らの経験の意味や地域の特徴を改めて見つめなおし、再評価・再発見する契機となる。また、アンケートやヒアリングに応じてエピソードを提供するだけでなく、エピソード選択の過程に関わることは、地域住民にとって当プロジェクトや作品制作への当事者意識を高めることにつながる。



制作作業の進捗報告、本図制作前の内容確認の機会を兼ねて、多世代交流イベント「湯河原の昔へGO!」を開催した(図5)。老人クラブに依頼して、各地区約2名ずつの語り部に参加してもらい、小学校等を通じて依頼して参加した小学児童およびその保護者らを対象に、下絵の場面の画像データを切り取った「エピソードカード」を用いて、クイズ・紙芝居形式で地域や語り部の記憶を語り合い、聞きあうゲームを行った。

当イベントは、特に語り部世代に対しては、絵図完成後の「絵解き」などでの活用に向けたイメージトレーニングとしての意味もあった。

なお、当イベントは演劇プロジェクトによる公演と2本立てのプログラムで開催した。

#### 【本図制作】

下絵の制作、確認、意見を反映した修正を経て、本図の制作をすすめ、12月14日に絵図が完成した。完成した絵図は活用に向けてデジタルデータ化するためスキャンし、表装作業に出した。1月20日に表装が完了し、「湯河原ふるさと絵屏風」が完成した。

#### 【本図完成・披露・活用試行】

多世代交流・多世代共創コミュニティ形成のための絵屏風活用に向けて、展覧会や絵解き会を企画・実施した(図6)。

まず、完成後間をおかず、制作協力者・関係者向けに絵屏風の内覧会・披露イベントを開催した。完成披露会には町長も列席し、除幕式、絵師による制作過程報告と画面構成等の解説、プロジェクトメンバーによる絵解きと今後の活用に向けた提案等を行った。披露会後には、会場である図書館で半日展示・公開した。地元出身者は絵に触発されてさまざまなエピソードを語る。ある建物を指さしながら「この窓の中に父が見えるようだ。この建物で働いていたのです。」というように、画面に没入したり、画面上の人物に自分を置き換えて語るなどの場面もたびたび観察された。新しく湯河原町に移住してきた人と、もともと地元に住む人とが共に絵図を見ながら問い、答えるという場面も多々観察された。歓声のニュースと完成披露会の様子はマスコミでも報道されたため、市民からの問い合わせが相次ぎ、急遽複製を役場玄関ホールに展示することになった。

なお、役場内で検討の結果、絵屏風実物は町立美術館で展示・公開することにし、各地区、公共機関、学校等には複製を設置して活用することになった。

完成披露会に続いて、居場所プロジェクトによる「多世代の居場所」での絵解きイベントを開催した。多世代の居場所に隣接地区の語り部と絵師を招いて、複製画を掲示しながら絵解きを行った。この際、あえて完成したプログラムは組まず、なりゆきに任せるかたちをとって観察した。その意図は、たとえば囲炉裏端を囲みながら、あるいは法事など、親類縁者の集まる席で、自然に記憶や思い出話が語り出され、問わず語り、あるいは聞くとはなしに、記憶や物語が共有・継承されていくような、かつての地域社会や家庭での伝承の場のあり方、にならったのであり、それも多世代共創の場のデザインではないかと考えたためである。

あらかじめ絵解きを依頼していたのは1名の方であったが、参集した語り部同士の合いの手や掛け合いが自然に生まれ、あるいは好きな講談の調子で当時の行商などの様子を再現する人もいて、同じ絵図を見ながらも、それぞれの趣味やキャラクターに応じた多様な語りが発する状況が観察された。

また、この絵解きの会に触発された児童が、絵を見るだけでなく、今度は自分で絵を描いてみたいと希望したことを受け、後日、絵師の協力・指導を得て多世代の居場所での絵画教室ワークショップが開催された。

以上、今年度の成果について絵図の制作の経過に即して述べた。次年度は各地区に設置した複製版の絵図を、さまざまな機会に絵解きなどを通じて活用することによって、多世代交流から共創への展開を図ることになる。併せて、語り部の会の組織化や、温泉・観光地ならではの地域活性化と結びつけた展開にもつなげていき、絵図とその活用が、研究・

プロジェクト期間終了後もひとり立ちし、ひとり歩きするように仕掛けて行きたい。

### ◆ 3. 多世代拠点づくり

#### □ 子どもたちと一緒に、DIY 型のワークショップ

5 月から、地域の子どもたちと共に DIY 型のワークショップ形式のリノベーションを実施した。子どもたちが安心して、かつ安全にリノベーションに参加できるよう、プロの建築家の山崎さんに現場監督として立ち会ってもらい、学校帰りの放課後に立寄り参加できる放課後リノベーションの形をとった。ほぼ毎日のように開催していたため、子どもたちの保護者の方々や地域の皆さんも興味をもってくださり、放課後リノベーションを通して、多世代の拠点を知ってもらえる機会となった。また、地域の方々が、居場所の中に設置する手すりを寄付してくださったり、子どもたちの湯河原といえば、みかんの木を植えたいという願いに応じて、みかんの木を寄贈してくださったりと、リノベーションを通じて、地域の子どもからお年寄りまでが交流し共に多世代の居場所をつくる、多世代共創の場となった。

#### □ ゆがわらっことつくる多世代の居場所オープニング\_2016 年 11 月 13 日

11 月 13 日に、ゆがわらっことつくる多世代の居場所のオープンとなり、富田町長、地域政策課課長、社会教育課課長をはじめ、多くの町の関係者、地域の方々が参加してくださり、多世代共創の場、誰もが安心して過ごせる場としての期待の声を寄せてくださった。オープニングイベントでは、子どもたちの湯河原といえば、足湯！という声にこたえ、湯河原の NPO 湯河原元気隊のみなさんが足湯をご用意してくださった。また、子どもたち念願のみかんの植樹イベント、湯河原のマスコットゆたぼんも参加し、多世代でのテープカットも行った。オープン日を迎えたものの、名前も決まっていない、本棚なども完成していない、未完成の場だからこそ、多くの方々が「居場所のネーミング」「どんな居場所にしたい？」という子どもたちが用意したポスターに声をよせてくださり、多くの方々が参画できるスペースを残した良い形でスタートとなった。

#### □ ゆがわらっことつくる多世代の居場所の日常\_2016 年 12 月～2017 年 01 月

11 月 13 日のオープン後は、平日 14:00-17:00、土日 10:00-17:00 を開所とし、地域サポーターの方にも入ってもらいながら場の運営を行った。11 月は居場所利用者が少なかったものの、各学校でのチラシ配布や子ども、保護者の方々の口コミを通じて、平日は子どもたちを含め 10-15 名程度、土日は 20-30 名程度が利用していた。開所後、縁側作りワークショップ、手作りクリスマス会、書き初めなどを実施し、日常生活の中では出会わない異なる年代で交流し過ごすことのできる、多世代共創の場となった。週末は、子どもの提案で始まったお味噌汁作りが恒例となり、地域のお母さんと幼児、一人暮らしのお年寄りの方もお昼に集い、みんなで食べるのが日常風景となった。保護者の方からも、この場に来ると、子どもも親も自己肯定感が高まるという声を頂いており、理想としている子どもからお年寄りまでみんなが安心して過ごせる多世代の居場所に近づいている。

#### ゆがわらっことつくる多世代の居場所の日常\_2017 年 02 月～03 月

「自分たちでお店を出店し、自分たちが安心して過ごすことができる多世代の居場所の資金を稼ぎたい!自分たちの居場所を守りたい!」という子どもたちの声をもとに、子ども屋台のプロジェクトが立ち上がった。具体的には、自分たちでみかんジュースなどを作り、居場所の活動資金を自ら稼ぎ、持続可能な運営を目指すべく、子ども屋台ワークショップを実施した。2 月上旬に、子どもたちが持ち運べるハンディ屋台を DIY ワークショップ形式で製作した。その後、2 月下旬に、ハンディ屋台を持って、町内の商店街でのぶらん市に出店する 2 店舗において、見学及び販売の実践体験を行った。

3 月には、3 日間の子ども屋台ワークショップを開催した。町内の子育てママを中心としたコミュニティ、年に 2 回大きなフリーマーケットを実施している団体の方に、子ど

もたちが考えていることを自らプレゼンし、フィードバックをいただいたり、旅する小商いをされている方、町内でお豆腐屋さんを営む方に講師として来ていただき、実際に売れる商品のポップを考えたり、みかんジュースの試作品づくりを実施した。「自分たちの居場所を守るために、自分たちで商売をして稼ぎたい。」という一生懸命な子どもたちの姿に、サポートして下さった地域の方々から、子どもたちに恥じないように大人も頑張らなくてはとコメントを頂き、子どもと大人のエネルギーが循環しながら、多世代の居場所を中心とした、持続可能なプロジェクトが湯河原町内で発展していくのだろうという期待が生まれた。

#### ◆ 4. 演劇ワークショップ

【概要】 発表会を含めた全 4 回の演劇ワークショップ

【テーマ】 多世代コミュニティづくり、多世代で未病にとりくむまちづくり

今回は、ワークショップの中での創作過程において、運動や食生活など、町民が日常的に取り組んでいる健康的な生活についてとりあげることにした。

【日程】

第 1 回：平成 28 年 10 月 22 日（土）14～17 時 顔合わせ、シナリオの意見交換

第 2 回：平成 28 年 10 月 29 日（土）14～17 時 アイデア出し、シナリオづくり

第 3 回：平成 28 年 10 月 30 日（日）14～17 時 作品づくり

第 4 回：平成 28 年 11 月 5 日（土）15～15 時 30 分（約 30 分）

ゆがわら多世代ふれあいイベント「タイムマシンパーク」で発表

【開催場所】 第 1～3 回は教育センター 第 4 回は町民体育館

【参加者】 5～88 歳までの男女計 15 名が 1 回以上参加した。参加者の内訳は、幼児 1 名、10 代 1 名、20 代 2 名、30-40 代 3 名、50-60 代 3 名、70 代以上 5 名。うち 3 名は大学生、2 名は大学教員、1 名は役場職員、その他は無職・パートなどであった。

【スタッフ】

蓮行（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター）、劇団衛星（京都市）代表

劇団衛星よりコミュニケーションティーチャー（俳優）2 名

NPO 法人フリンジ下-プロジェクトよりコーディネーター 1 名

他、研究プロジェクトメンバー

【お芝居のあらすじ】

本年度は「ゆがわらタイムマシン・シアター」というテーマとし、運動や食生活など、町民が日常的に取り組んでいる健康的な生活についてファシリテーターが中心となって意見交換を行い、参加者全員で内容を検討し、未来人が現在と過去の湯河原町にタイムスリップをしながら、様々な湯河原町民と出会い健康的な生活について模索していくという演劇を制作した。

【インタビュー対象者】

ワークショップに参加した者でインタビューへの協力の同意が得られた 4 名

【インタビュー結果】

高齢の参加者は「参加後に、小学生やその保護者から声をかけられるようになった」、40～50 歳代の参加者からは「演劇ワークショップ後に参加していた高齢者とパターゴルフに行くようになった」など、ワークショップ参加を通して多世代の交流がより深まり継続することが示唆された。

また、平成 27 年度の演劇ワークショップにおけるインタビュー結果について、平成 27 年 6 月 11～12 日に開催された第 7 回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会（開催地：東京）にてポスター発表を行った。平成 28 年度の本活動に関しては、平成 29 年 5 月 13～14 日の第 8 回日本プライマリ・ケア（開催地：高松）にて発表予定である。

## ◆ 5. 要介護度進展の予測および介入・評価

### 1. プレ調査、本調査結果解析

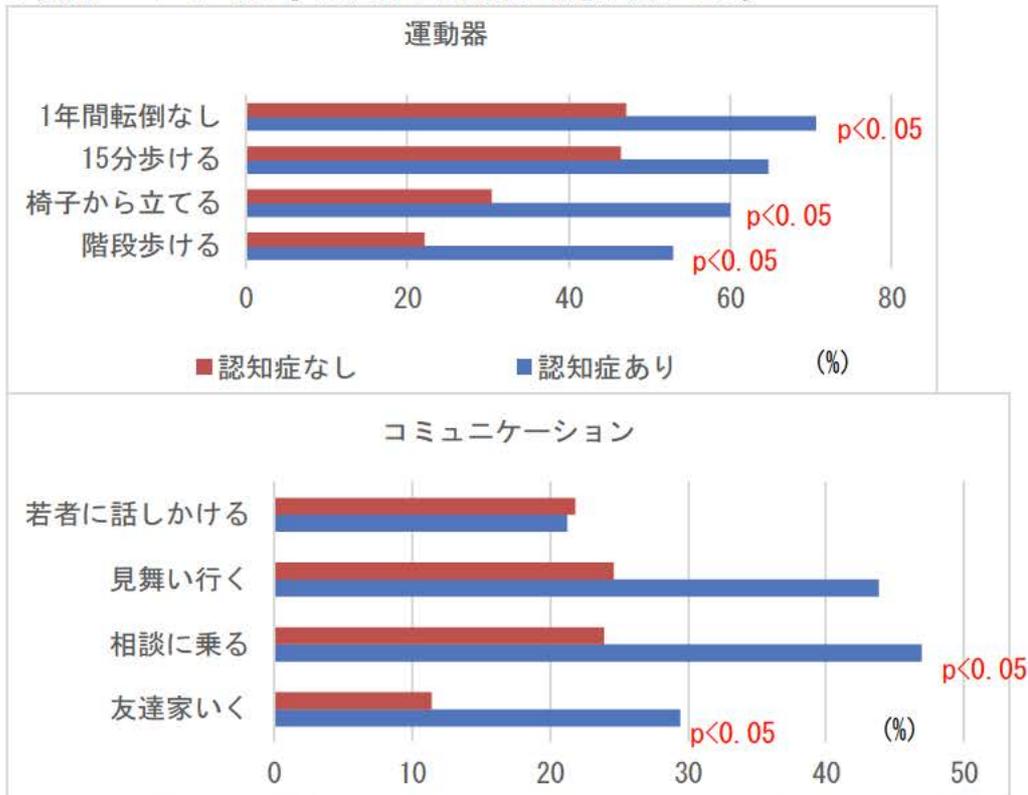
平成 26 年及び平成 27 年に本プロジェクト開始前のプレ調査及び本調査として、湯河原町の介護福祉施設利用者 126 名を対象に質問紙を用いた聞き取り調査を実施した。質問項目は、既存のスケールを用いた QOL（生活の質）、ADL（日常生活動作）、APDL（生活関連動作）、及び、健康状態の評価等とした。本調査の最大の特徴は、自記式では回答できない認知症患者等に対し、調査員が高齢者介護福祉施設を訪問し、一人一人に対し、聴き取り式の方法により実施した点である。

上記調査結果について、平成 28 年 6 月に行われた第 66 回日本病院学会にて口演発表した（2 演題）。

#### 「認知症高齢者の正確な精神・身体状況を把握するための調査方法の検討」

認知症が高齢者の回答に与える影響を明らかにすることで、質問項目として課題のあるものを見つけ、認知症高齢者の正確な精神・身体状況を把握するための有効な調査方法を検討することを目的とした。湯河原町の介護福祉施設利用者 126 名を対象に質問紙を用いた聞き取り調査を実施した。調査項目は属性、APDL、活動能力指標、高齢者基本チェックリストであった。これらの質問群を 10 群に分け、認知症群と非認知症群の各質問に対する回答を、高齢者の身体状況も考慮し解析した。

身体状態に近い高齢者において認知症群は非認知症群に比べ、コミュニケーションに対する質問群に含まれる 4 つのうち「友達の家を訪ねるか」等の 2 つの質問、及び運動器に関する質問群に含まれる 4 つのうち「階段を手すりなしで上ることができるか」等の 3 つの質問について「はい」と回答した割合が有意に高かった。



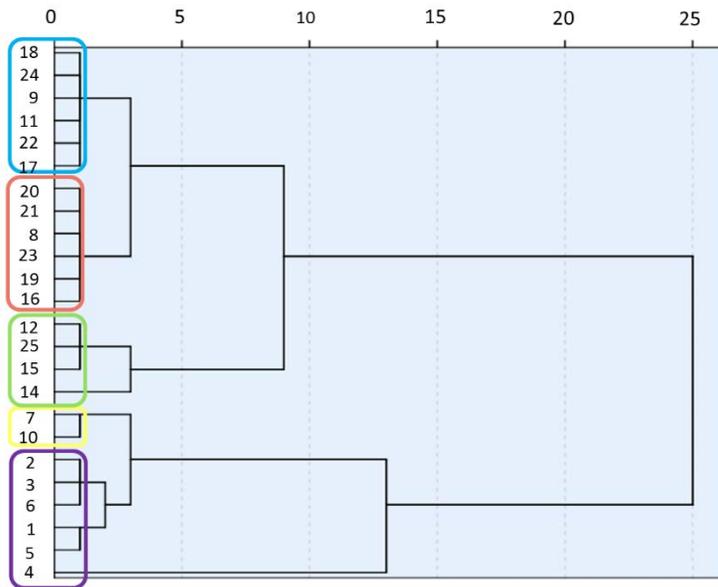
認知症高齢者の運動器・コミュニケーションの正確な評価を行うには、現在のチェックリストのみでは不十分であり、MMT 等の客観的な評価や介護職・家族といった周囲との情報と照合することが有効である。さらに、継続的に健康状態を評価するに当たり、健康状態のデータを定期的チェックするシステムの必要性が考えられた。

(2) 「介護施設利用者に適する介護度進展評価方の提言」

本プロジェクトの調査で用いている高齢者基本チェックリスト等から施設利用者の健康状態の把握に有効な調査項目を検討し、施設利用者の介護度進展を予測できる新たな評価方法を提言することを目的とした。神奈川県湯河原町の介護施設利用者に質問紙を用いた聞き取り調査を実施した。高齢者基本チェックリストの調査結果について階層クラスタ分析を行った。

高齢者基本チェックリストで得られた回答の分布は、大きく2つのクラスタに分けられ、「バスや電車を使って1人で外出できますか」や「友達の家を訪ねることがありますか」等の質問項目においては、介護度の影響が大きいクラスタに分類された。一方、「過去2週間毎日の生活に充実感がないと思いますか」等の質問項目においては、介護度の影響が小さいクラスタに分類された。

ジャンル	番号	質問項目	回答率 (%)
社会参加	1	バスや電車を使って一人で外出できますか	93.2
	2	日用品の買い物はできますか	93.1
	3	銀行貯金・郵便貯金の出し入れができますか	92.2
	4	友達の家を訪ねることがありますか	94.6
	5	家族や友達の相談に乗ることがありますか	91.3
運動器	6	階段を手すりや壁をつたわずに昇ることができますか	93.2
	7	椅子に座った状態から何もつかまらずに立ち上がることができますか	95.0
	8	15分位続けて歩くことはできますか	94.0
	9	この1年間に転んだことがありますか	92.2
	10	転倒に対する不安は大きいですか	91.8
栄養	11	6カ月間で2～3kg以上の体重減少がありましたか	73.9
	12	<b>BMI</b>	<b>33.3</b>
口腔	13	半年前に比べて固いものが食べにくくなりましたか	91.8
	14	お茶や汁物等でむせることがありますか	95.5
	15	口の渇きがきになりますか	94.1
閉じこもり	16	週に1回以上は外出していますか	94.1
	17	昨年と比べて外出の回数が減っていますか	93.2
物忘れ	18	周りの人から「いつも同じことを聞く」などの物忘れがあるとされますか	88.6
	19	自分で電話番号を調べて、電話をかけることをしていますか	92.7
	20	今日が何月何日かわからない時はありますか	92.7
こころ	21	過去2週間毎日の生活に充実感がないと思いますか	87.7
	22	過去2週間これまで楽しんでやれていたことが楽しめなくなったと思いますか	82.7
	23	過去2週間以前は楽にできていたことが今ではおっくうに感じられますか	84.0
	24	過去2週間自分が役に立つ人間だとは思えないことはありますか	79.0
	25	過去2週間わけもなく疲れたような感じはしますか	87.7



施設利用者に対し、自由な外出や友好関係を評価する項目を聞くことは、施設での規則があり、なおかつ、既に介護度の影響が大きいことから、今後の介護度進展を評価する上で不適切であると考えられる。一方、心の状態を尋ねる項目においては、現段階における介護度の影響が小さく、今後の介護度進展の評価をする上でも適用性が高いと考えられる。

## 2. 湯河原町と共同実施した高齢者の健康状態、外出頻度及び使用交通サービス調査

平成 28 年 8 月に湯河原町と共同して、65～79 歳の町民 1500 名を対象とした「日常の交通手段と外出に関する湯河原町民アンケート」調査を実施した。本調査は、住民基本台帳より無作為抽出し、郵送方式で行った。780 名 (52.0%) より回答が得られた。質問項目は、交通手段・外出頻度及び健康状態等とした。

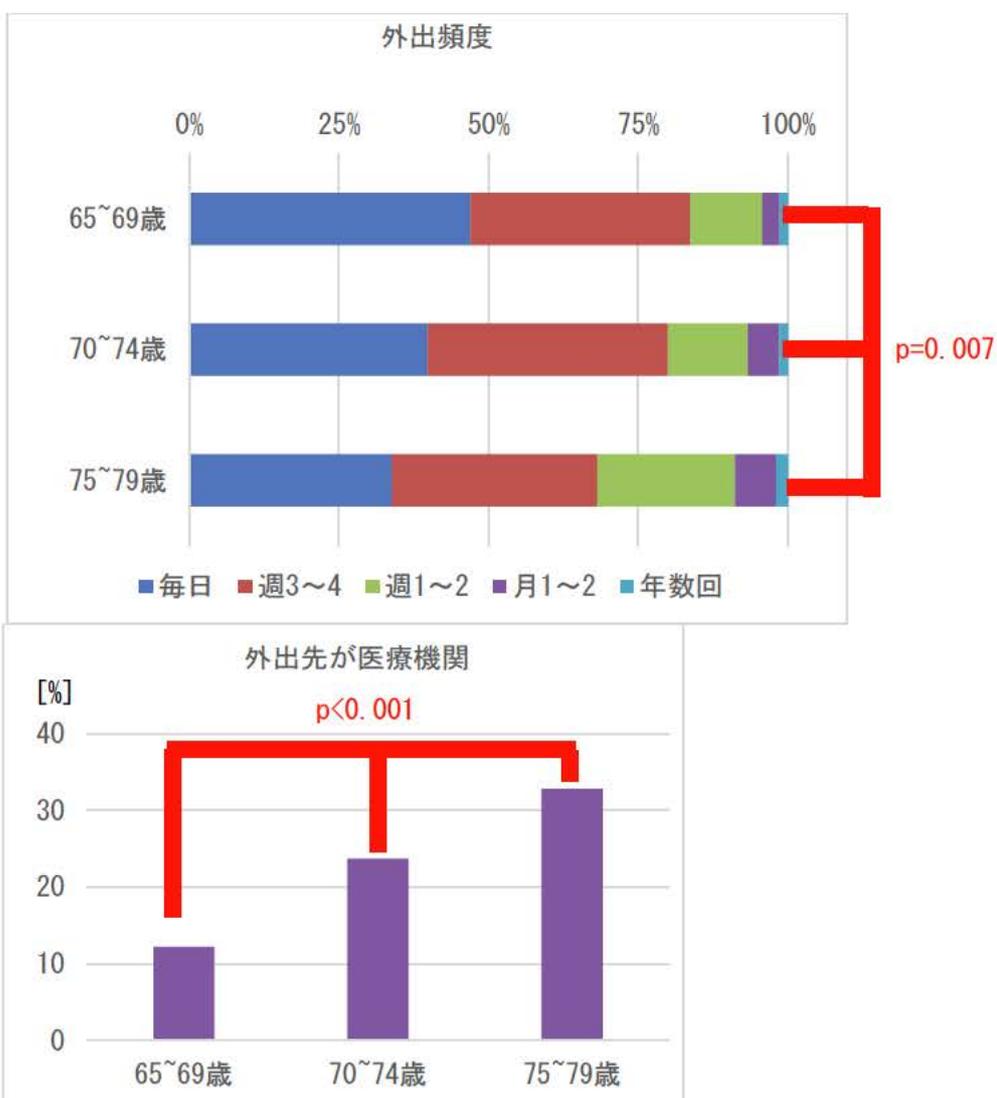
上記調査結果を平成 28 年 11 月に行われた第 75 回日本公衆衛生学会総会において口演発表した (1 演題)。また、調査結果報告書を作成し、平成 29 年 8 月に湯河原町長に説明、提出し、町政立案へ寄与する予定となっている。

### (1) 「高齢者の交通手段から検討する外出行動と健康」

過疎地域の高齢者への交通サービスの提供方法と健康状態への関連を調べるために、神奈川県湯河原町在住の 65～79 歳の高齢者を対象に郵送によるアンケート調査を行った。調査項目は、交通手段・外出や健康状態等である。回収したデータについて SPSS を用いて解析を行った。

アンケート回収率は 52.0%であった。年齢別に外出頻度を見ると、年齢が高い群の方が低い群よりも外出頻度が有意に低かった ( $p=0.007$ )。

また、高い群の方が低い群よりも有意に医療機関に行く割合が多かった ( $p<0.001$ )。

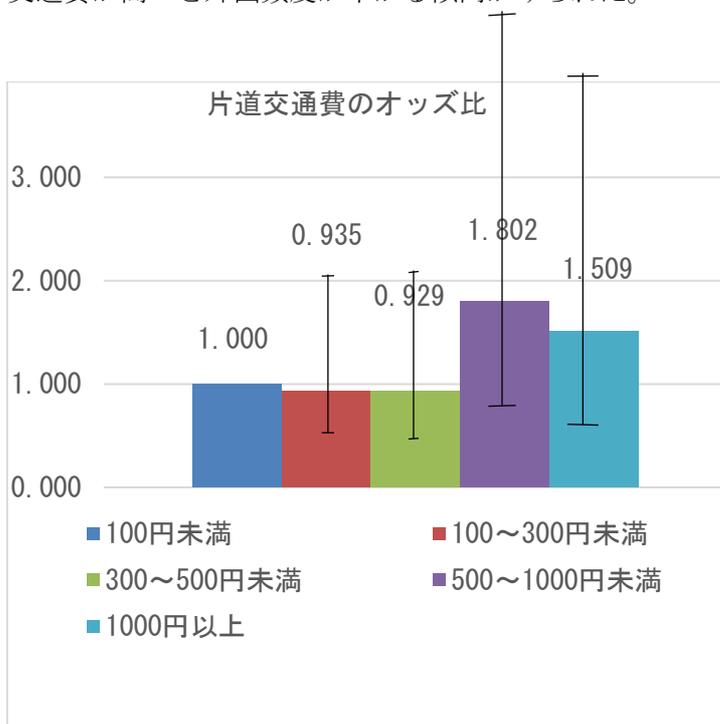


外出頻度が減る一方で、行き先は生活する上で必要不可欠な場所に限られてきていることが示唆された。

次に、外出頻度を下げる要因を明らかにした。外出頻度を週1~2回よりも少ない群を閉じこもり群として考えられる因子についてオッズ比を求めた。今回は、「同居の家族の有無」「虚弱高齢者（高齢者基本チェックリストより評価）」「バス停からの距離」「片道交通費」の4つの因子について検討した。その結果、虚弱高齢者であるといわれた群の方が有意にオッズ比が大きく、外出頻度の低下がみられた。

カテゴリー	説明変数	オッズ比	オッズ比95%信頼区間		p値
			下限	上限	
同居の家族の有無	一人暮らし	1.06	0.65	1.74	0.803
	夫婦	0.94	0.62	1.45	0.785
	多世代	1.00	reference		-
	その他	1.12	0.47	2.49	0.782
虚弱高齢者	非虚弱	1.00	reference		-
	虚弱	2.44	1.61	3.70	<0.001
バス停からの距離	近い	1.00	reference		-
	遠い	1.07	0.74	1.53	0.729
片道交通費	100円未満	1.00	reference		-
	100～300円未満	0.94	0.44	2.14	0.868
	300～500円未満	0.93	0.40	2.28	0.868
	500～1000円未満	1.80	0.77	4.44	0.177
	1000円以上	1.51	0.66	3.64	0.334

また、片道の交通費については、reference との比較では有意な差はみられなかったが、「100～300円未満」と「500～1000円未満」の間でオッズ比に有意な差がみられ、片道の交通費が高いと外出頻度が下がる傾向がみられた。



以上より同居の家族の有無は、外出頻度に影響しない一方で、健康状態の悪化は外出頻度低下の要因であることが示唆された。また、自宅からバス停までの距離は外出頻度に影響しない一方で、片道の交通費が高いと外出頻度が下がることが示唆された。

以上のことから、高齢者が暮らしやすい街づくりの一環として、交通サービスの観点から高齢者の交通費の負担を軽減させる交通割引サービスや、坂や細い道が多く、なかなかバスが走れない地域も網羅できるような交通サービスの提供を考えた。

交通サービスとしては、乗り合いタクシーなど運営側の人員削減や乗客の運賃の軽減の双方にメリットがあるものがよいと考える。また、虚弱高齢者への配慮として、介護保険サービスに交通費補助などの現物支給を導入するなど外出を促すサービスの提供が考えられた。

### 3. プロジェクト横断調査

本プロジェクトにおいて湯河原地域で行われている「ふるさと絵屏風プロジェクト」、  
「演劇ワークショップ」の参加者に対し、質問紙を用いた聞き取り調査を実施した。質問  
項目は、年齢、健康状態（基本チェックリスト等）及びプログラムの満足度、改善点等と  
した。また、本プロジェクトが現時点において湯河原町民に与えている影響を明らかに  
し、町民内に浸透する方策を模索するため、質問紙を用いた聞き取り調査を実施した。質  
問紙は、属性、プロジェクト参加の有無、プロジェクトを知った手段等とした。

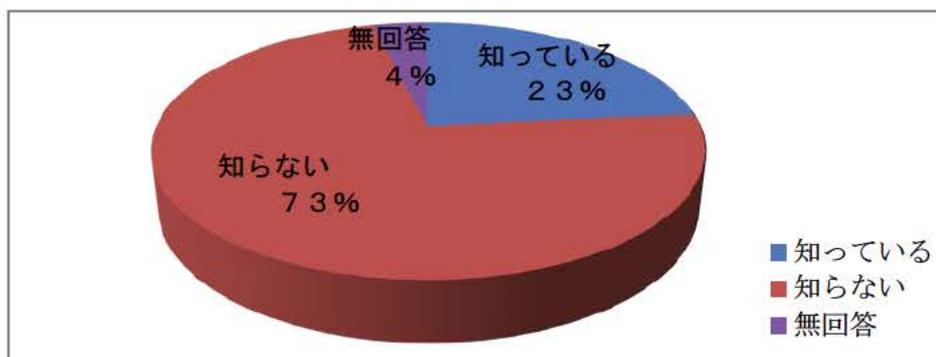
上記調査結果について、平成 28 年 11 月に行われた第 75 回日本公衆衛生学会総会にお  
いて口演発表した（1 演題）。

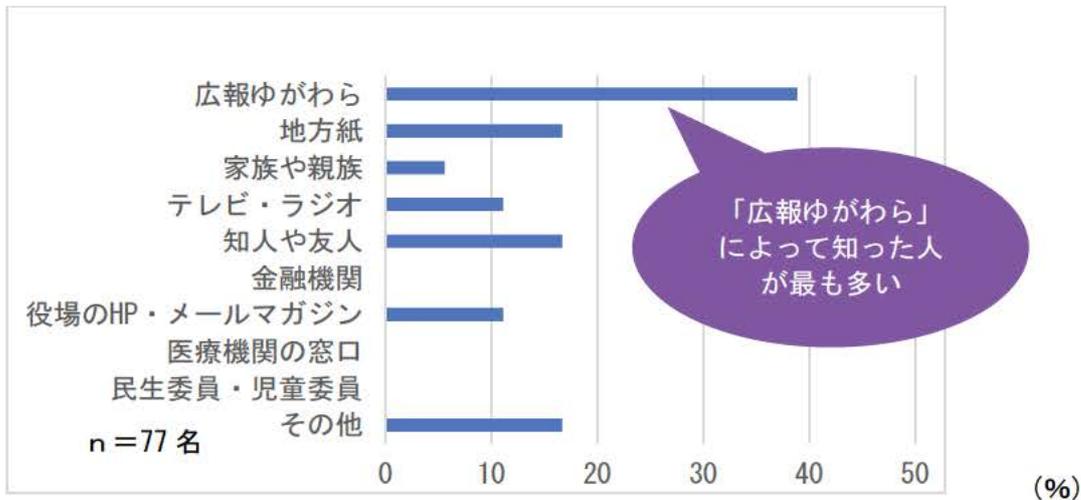
#### （1）「多世代共創プロジェクトに対する要介護者への適用性の評価と参加者の増加に向 けた検討」

多世代共創プロジェクトの開発・実装を行い、プロジェクトの内容評価を行うことで、  
虚弱高齢者の参加のための具体的な方策を模索することを目的とした。本プロジェクトの  
「ふるさと絵屏風プロジェクト」及び「演劇ワークショップ」の参加者に対し質問紙を用  
いた聞き取り調査と、湯河原町のエスポート湯河原店前にて湯河原町民に対し質問紙を用  
いた聞き取り調査を実施した。得られたデータについて、質的研究及び統計学的解析を行  
った。プロジェクト参加後に、参加した後の全体的な満足度を尋ねたところ、68%の人が  
満足、やや満足という結果が得られた。また、参加後の評価としては「精神状況の向上」  
「身体状況の向上」「知識・能力の習得」「世代間交流」「地域活性化」につながるとい  
う主に 5 つの評価が得られた。このことから、プロジェクトを通じて、多くの恩恵が得ら  
れていることがわかる。しかし、満足度と比較して参加者が少ない点が問題に挙げられ  
た。

街頭アンケートの結果により、本プロジェクトの認知度について、73%の人が知らない  
という結果であった。

次に、プロジェクトを知った手段について、広報ゆがわらで知ったという人が最も多か  
った。





また、プロジェクトに参加したい人は、参加したくない人に比べ地域の人との会話を楽しめるプロジェクトを求める割合が有意に高かった ( $p=0.016$ )。65歳以上においてはプロジェクトに参加したい人は、したくない人に比べ、身近な高齢者も参加させたいという割合が有意に高かった ( $p<0.001$ )。虚弱高齢者では身体的制約によつての消極的活動群に陥る。また、積極的活動群の不参加理由として地理的制約・対人関係の不安があった。したがって、これらを取り除くような「プロジェクトの見学・体験」、「交通手段の用意」、「家族や介護者と共に参加」などの取り組みの必要性が示唆された。

#### ◆6. 温泉泥の関節痛に対する効果の検証

今年度中に計画していた温泉泥の実験は、実験場所として計画していた湯河原の温泉旅館・大観荘が競売によつて平成28年6月より使用できなくなるというアクシデントに見舞われたことから、平成29年1月より湯河原町と協議を重ねた。

富田町長より、町営(温泉場区会に運営委託中)こごめの湯を今後の温泉泥施術の拠点としたいという提案がされた。今回の実験だけではなく、その後も継続して温泉泥の施術を行う拠点として、今後も町が関与していきたいという意向であった。温泉泥の施術室に関する整備費用は議会の承認を得たうえで、平成29年6月の補正予算から町が捻出することが決まった。実際に町営温泉で温泉泥の施術を行うためには、施術室として使う空部屋の有無、源泉の確保、プラントからの泥の搬入・搬出方法の検討、シャワーブースの新設、使用する居室等の床の改良等が必要であり、それらを整備するには一定の経費を要する。また既に指定管理者として町営温泉・こごめの湯の運営を預かっている湯河原町温泉場区会の協力・承認も必要となる。

そこで平成29年1月から2月にかけて、湯河原町、湯河原町温泉場区会の担当者とも協議を行った。施術場所については、現在マッサージ組合が借りている20畳の広間を半分にして使う案、個人休憩用の8畳の和室を転用する案が出されたが、現在のこごめの湯の運営体制を崩さずに行うためには、20畳の広間をマッサージ組合と分け合うのが最も良いという結論になった。ファンゴプラントは露天隣風呂近くの屋外敷地に設置することが決まり、ここから人力で台車に乗せてエレベーターを使って排出入することになった。また泥を洗い流すシャワーブースはバルコニーに設置することとした。以上一連の施設改修については、湯河原町観光施設課が取り仕切り、大和田が書いた図面に基づいて、平成29年4月に各指定業者に見積を依頼する段取りとなった。



万葉公園に隣接する「こごめの湯」



温泉泥施術拠点として計画中の 20 畳の和室

#### ◆ 7. 多世代健康教育

湯河原町役場ならびに保健センターとの調整がつかず、H28 年度は実行には至らなかった。しかし、こごめの湯に恒久的なファンゴ施設を設置し H29 年度温泉グループの活動場所として使用できることが決まっており、多世代検診会場も多くの人が集まりやすいこごめの湯でおこなう方向で計画している。

実施時期としては、H29 年 7～8 月の夏休み期間中を予定している。ファンゴ被験者の募集には町役場が協力してくれることになっているので、ファンゴ試験と同じ時期に併せて健康診断参加者も募集する。また、小学生の募集は、こごめの湯に近い子供会の協力を得ることで実施のハードルを下げる。

#### ◆ 7. 多世代健康教育

多世代で未病に取り組む活動の一環として、世代を超えた伝承を特徴とした多世代健康教育を実施した。湯河原町内では子どもの肥満等が課題となっていることから、教育目標は「咀嚼の重要性に関する知識習得と食習慣の定着」とした。

#### 7.5 結果とフィードバック

介入前後の咀嚼回数について t 検定を行なった結果、介入前 1175.45 回、介入後 1390.95 回で 5%水準で有意に噛む回数が増えていた。また咀嚼力については、咀嚼力判定ガムの a-f の順序尺度を、数 1-6 (数値が大きい方が噛む力が強い) の数値に置き換えて t 検定を実施したところ、介入前 4.85、介入後 5.1 となり、介入後が 5%水準で有意に咀嚼力が高かった。質問紙調査の結果については検証中である。

多世代教育の場では、大学生の来校を楽しみにする子どもの姿が見られた。フィードバックの時には大学生の名前を覚え声を掛ける姿が見られた。また、交流や食育の後には、毎回大学生と小学生が共に給食を食する時間を設けた。好き嫌いが多く牛乳が飲めなかった児童が、大学生がいるときには全部飲んだり、嫌いな野菜を残さずに食べたりという姿が見られた。

#### ◆ 8. 多世代健康診断

高知県黒潮町で施行している多世代健康診断を、湯河原の町営温泉場であるこごめの湯で行うように計画したが、町役場ならびに保健センターとの調整がつかず、実行には至らなかった。

#### ◆ 9. 未病の評価法の検討

平成 27 年度に収集した「湯河原多世代アンケート」「ゆがわらっこ人とのつながりについてのアンケート」「湯河原町 地域活動と多世代交流についてのアンケート」のデータを元に、尺度の信頼性・妥当性を検証する。項目の取舍選択を行いより質の高い尺度を構築するよう解析を進めた。

湯河原町の 20 歳以上の住民 1200 名を無作為抽出して郵送にてお願いした「ゆがわらっこ人とのつながりについてのアンケート」（回答数 732 名。有効回答数 394 件（有効回答率 19.7%）。女性 62.4%、男性 36.8%。平均年齢 55.77 歳（S.D. 14.60）。）では多世代交流のある人の方が、生きがいが高いことが分かった。また、65 歳以上で働いている人は働いていない人に比べて生きがいが高いが、働いている人の中では、常勤よりも非常勤の人の方が、生きがいが高いことが分かった。

解析は現在も続いており、平成 29 年度にはすべての解析を終了する予定である。

#### ◆ 10. ライフログアプリ作成とコミュニティ形成アプリ

湯河原町でもコミュニティの重要性は認識しており、平成 28 年度は町で活動するコミュニティを把握し、紹介冊子を作成することを目指して活動した。平成 27 年度に作成した「クチコミュ・湯河原」サイトとの連携を図るべく、湯河原町地域振興課と話し合いを進めた。町の最終成果物ができた後で、相互リンクに関する話し合いを進める。

また、ライフログアプリとして、食・運動・服薬に加えて、「人と会話したか」という項目を設けて他人との交流の度合いを測るアプリを作成した。

健康増進計画でも高齢者の孤立化を防ぐために、「スマホの使い方講座の開催」が掲げられている。ライフログアプリ作成とコミュニティ形成アプリの活用については、地域振興課、保健センター、商工会などと話し合いを進める予定である。

### 3 - 5. 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
2016/4/4	居場所PJ 打ち合わせ	スカイプ	広報戦略
2016/4/5	絵屏風PJ	スカイプ	ゆがわらふるさと絵屏風プロジェクト曼茶羅作りイベントについて
2016/4/13	居場所PJ 打ち合わせ	スカイプ	広報戦略

2016/4/14	絵屏風PJ	スカイプ	ゆがわらふるさと絵屏風プロジェクト 曼荼羅づくりイベントについて
2016/4/21	教育センター打ち合わせ	教育センター	教育委員会 居場所・絵屏風プロジェクトの進捗報告
2016/4/23	打ち合わせ	ジョナサン湯河原店	区長、近隣挨拶の振り返りと今後の予定
2016/4/24	居場所PJ班 第7回企画会議 (概要のみ)	だがしやはな	企画会議#7
2016/4/24	居場所PJ班 第7回企画会議	デニーズ湯河原店	リノベーションの進め方
2016/4/27	打ち合わせ	スカイプ	県教育PJとの情報共有について
2016/5/9	居場所PJ 打ち合わせ	スカイプ	居場所でのデータ収集等について
2016/5/9	絵屏風、居場所PJ 打ち合わせ	スカイプ	各研究会での曼荼羅づくり、居場所プロジェクトの説明について
2016/5/10	飯盛研究会曼荼羅作り	SFC ε 11	居場所プロジェクトの説明 湯河原エリア(温泉場・宮上・宮下・城堀・門川)の曼荼羅作成
2016/5/13	居場所PJ班 搬出作業	ゆがわらっこと作る多世代の居場所	搬出作業
2016/5/14	居場所PJ班 搬出作業	ゆがわらっこと作る多世代の居場所	搬出作業
2016/5/15	居場所PJ班 第8回企画会議	ゆがわらっこと作る多世代の居場所	企画会議#8
2016/5/16	居場所PJ班 搬出作業	ゆがわらっこと作る多世代の居場所	搬出作業
2016/5/16	健康教育PJ	湯河原町教育委員会	健康教育の進め方について
2016/5/20	絵屏風居場所PJ 打ち合わせ	スカイプ	絵屏風プロジェクトのイベントに向けてのブレインストーミング

2016/5/24	居場所PJ 打ち合わせ	スカイプ、 ε 403	居場所プロジェクト、安全管理体制等について
2016/6/1	居場所PJ	湯河原町教育委員会 教育センター	湯河原町教育委員会（校長会）にてアンケート結果の報告と活動の紹介を行なった
2016/6/13	居場所PJ 打ち合わせ	スカイプ	居場所プロジェクト
2016/6/13	絵屏風、居場所PJ 打ち合わせ	スカイプ	絵屏風プロジェクト 6/23 説明会にむけて
2016/6/20	居場所PJ 打ち合わせ	スカイプ	居場所プロジェクト
2016/6/23	居場所PJ 打ち合わせ	ジョナサン 湯河原店	ゆがわらっことつくる多世代の居場所 長期ビジョンのたたき台の作成
2016/6/23	絵屏風、居場所PJ 打ち合わせ	保健センター2階 小会議室	絵屏風プロジェクト 今後の予定等
2016/6/23	絵屏風づくりの進捗報告と今後の予定についての説明会	保健センター2階 集団指導室	10 地区の代表者(各地区 1-2 名)に、絵屏風プロジェクトの進捗をお伝えする。またエピソード選定について依頼した
2016/6/27	居場所PJ 打ち合わせ	スカイプ	耐震診断、7/2 の話し合い
2016/7/4	居場所PJ 打ち合わせ	スカイプ	居場所プロジェクト耐震工事、運用について
2016/7/11	居場所PJ 打ち合わせ	スカイプ	居場所プロジェクト耐震工事、運用について
2016/7/19	居場所PJ 打ち合わせ	スカイプ	居場所プロジェクト耐震工事、資金調達、やっさ祭、学生滞在場所について
2016/7/24	絵屏風PJ 打ち合わせ	スカイプ	湯河原町役場、美術協会来訪 事前打ち合わせ
2016/7/25	絵屏風PJ 美術協会活動初日	湯河原町教育センター 202 会議室	湯河原町美術協会 松野様との打ち合わせ。鍛冶屋地区、イラスト作成（役割分担）
2016/7/25	湯河原町役場 絵屏風PJ 打ち合わせ	湯河原町地域政策課	絵屏風に係る子どもと高齢者の集い企画についての打ち合わせ

2016/7/26	健康教育 PJ	東台福浦小学校	健康教育の進め方について
2016/7/28	居場所 PJ 打ち合わせ	スカイプ	居場所プロジェクト耐震、工事後運用について
2016/8/2	やっさ祭り	湯河原町内	湯河原町の祭りに神輿の担ぎ手として学生メンバーが参加
2016/8/3	居場所 PJ 打ち合わせ	ご縁の社	居場所プロジェクトやっさ祭り、耐震工事、リノベーション、渡辺研合宿について
2016/8/17	居場所 PJ 打ち合わせ	スカイプ	居場所プロジェクト WS 前準備、タイムスケジュール確認
2016/8/17	学生 WS 打ち合わせ	スカイプ	学生演劇ワークショップ 情報共有
2016/8/23	湯河原町役場 絵屏風 PJ 打ち合わせ	湯河原町役場 会議室	絵屏風に係る子どもと高齢者の集い企画についての打ち合わせ
2016/08/23-24	居場所 PJ 塗り塗りワークショップ	多世代の居場所	多世代の居場所の内壁に珪藻土を塗る作業を通して、多世代の交流を図る。
2016/8/27	学生演劇 WS 関連	門川会館	町民の方に大学生の演劇を知ってもらおうと共に、演劇を通じたコミュニケーションを町民と大学生が行うことで、多世代交流を促進した。
2016/9/5	居場所 PJ 打ち合わせ	スカイプ	居場所プロジェクト オープニングに向けて運営体制の構築
2016/9/5	居場所 PJ 議事録	スカイプ	居場所プロジェクト オープニングに向けて雲煙体制の構築
2016/9/8	敬老の集いに向けての準備	スカイプ	合宿で実施することの打ち合わせ
2016/9/13	健康教育 PJ	湯河原商工会議所	健康教育の進め方、研究、15 日について
2016/9/13	湯河原美術協会、敬老の集い	教育センター、商工会議所	絵屏風作成についてのヒアリングを行い、敬老の集い（9/24）の展示準備を行った
2016/9/14	敬老の集い準備、居場所プロジェクト	商工会議所、居場所プロジェクト活動拠点	高齢者の集い、食育、居場所の準備を行った

2016/9/15	健康教育 PJ	東台福浦小学校	健康教育の進め方、日程について
2016/9/15	健康教育 PJ 居場所 PJ	商工会議所、東台小学校、居場所プロジェクト活動拠点	東台小学校訪問のコンテンツを確認する。東台小学校を訪問。居場所にてリノベーション作業を行う。
2016/9/24	敬老の集い	町民体育館	絵屏風 PJ の紹介を行なった。
2016/10/2	居場所 PJ 打ち合わせ	スカイプ	居場所プロジェクト オープニングに向けて運営体制の構築
2016/10/11	絵屏風 PJ 打ち合わせ	スカイプ	絵屏風に係る子どもと高齢者の集い企画についての打ち合わせ
2016/10/19	居場所 PJ 打ち合わせ	スカイプ	居場所プロジェクト オープニングに向けての事項の確認と調整
2016/10/20	絵屏風 PJ 打ち合わせ	スカイプ	絵屏風に係る子どもと高齢者の集い企画についての打ち合わせ
2016/10/23	居場所 PJ 打ち合わせ	ゆがわらっこと作る多世代の居場所	居場所プロジェクト オープニングイベントに向けての準備
2016/10/26	居場所 PJ 打ち合わせ	ホテル四季彩	居場所プロジェクト オープニングに向けての事項の確認と調整
2016/10/27	健康教育プロジェクト	東台福浦小学校	東台福浦小学校を訪問し、第 1 回研究教育を実施する
2016/10/31	絵屏風 PJ 打ち合わせ	スカイプ	絵屏風に係る子どもと高齢者の集い企画についての打ち合わせ
2016/11/5	湯河原タイムマシーンパーク 絵屏風多世代交流イベント	湯河原町民体育館	絵屏風 PJ において湯河原の老人会の方々から子ども達へ昔のエピソード語りをゲーム形式で行うことで、多世代交流を図る。 演劇 PJ において「今と昔の暮らし」をテーマにした演劇を披露することで、健康意識の促進を図る。
2016/11/6	居場所 PJ 打ち合わせ	ゆがわらっこと作る多世代の居場所	居場所プロジェクト 進捗状況の共有、オープンに向けて確認事項の共有
2016/11/6	居場所 PJ オープニングに向けた準備	ゆがわらっこと作る多世代の居場所	居場所プロジェクト オープニングに向けての事項の確認と調整

2016/11/7	居場所PJ 打ち合わせ	スカイプ	居場所プロジェクト オープニングに向けての事項の確認と調整
2016/11/20	「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発領域 平成 28 年度領域合宿	クロスウェーブ府中	プロジェクト実施者と領域マネジメントグループの意識の共有とネットワークの構築
2016/11/21	健康教育、絵屏風、居場所PJ	東台福浦小学校	1. 東台福浦小学校を訪問し、第二回健康教育を実施する。 2. 絵屏風作成の現場である教育センターにて富田町長がホストであるラジオ番組の収録が行われ、湯河原美術協会の方々と学生、教員が出演した。 3. 居場所開所
2016/12/3	居場所PJ ふわはあとイベント	湯河原町民体育館	居場所プロジェクト ふわはあとイベントに出店且つ居場所の宣伝を行った。
2017/1/25	絵屏風PJ 打ち合わせ	湯河原町民図書館	居場所における絵屏風披露についての打ち合わせ。
2017/1/25	絵屏風PJ 湯河原ふるさと絵屏風除幕式・内覧会	湯河原町民図書館	昨年末に完成した、湯河原版ふるさと絵屏風のお披露目。除幕式および内覧会の開催。
2017/2/5	絵屏風+居場所PJ	ゆがわらっことつくる多世代の居場所	居場所における絵屏風披露。
2017/2/15	居場所PJ	スカイプ	児童への食品提供関係と本棚作り、ぶらん市についての打ち合わせ。
2017/2/18	居場所PJ	多世代の居場所	子供に食を提供する組織の顔合わせ。
2017/2/24	健康教育PJ	東台福浦小学校	東台福浦小学校を訪問し、6年生を送る会の見学及び5年生と交流する。健康授業の前後で行ったテストの結果を、簡単に子供達に報告する。
2017/3/6	居場所PJ	スカイプ	今後の居場所の運営についての打ち合わせ。

2017/3/15	居場所 PJ	スカイプ	今後の居場所の運営についての打ち合わせ。
2017/3/24	居場所 PJ	スカイプ	居場所の運営についての打ち合わせとスケジュール調整。
2017/3/28	健康教育 PJ	東台福浦小学校	小学校の先生方へ研究報告、今後について打ち合わせ。

#### 4. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

1. 持続可能な社会の実現にとって、どのような多世代的なアプローチが有効か？どのような問題に何故有効なのか？

そもそも「持続可能」を謳うということは、この社会が「持続可能ではない」ことの裏返しであるが、この社会が「持続可能かどうか」についての意識をあまりしていない国民がほとんどである。

湯河原町は現在高齢化率が 38%であり、2040 年には 48%に達する。行政はこうした事態を深刻に考えているが、地域住民で、この問題を深刻に考えている人は少ない。

一方地域のコミュニティは都心ほどでないにしても、湯河原町でも崩れている。婦人会、青年団などは入会者が減少し、保っているのが消防団くらいだという。

区長など地域住民を代表する人たちに、まずこの危機意識を認識してもらったうえで、何故多世代によるアプローチが必要なのかについても、自ら考えてもらうことが必要と考え、平成 28 年度は事実を共有した上で、ともに解決策を考えていきたい。

2. 特に若い世代（子供、学生、若年単身者、子育て世代等）にとって、多世代共創的活動に参加するためのインセンティブにはどのようなものが考えられるか？

時間的制約の多い世代に取って、コミュニティに参加することは難しい。やはり、コミュニティに参加することが町の存続のために重要だという共通認識を育成することが遠回りのように見えて近道かもしれない。

3. 持続可能な社会の実現にとって効果があると思われる多世代共創的活動の中で、一部の世代に十分なインセンティブがないことが障壁となっている場合、参加を促すために、どのような制度設計が考えられるか？

湯河原町においては、湯河原で生まれ育ったグループと高齢になってから移住した住民のグループもあり、交流がスムーズでない面もある。現在多世代拠点作成を進めているが、子供たちを中心にするるとさまざまな世代や職種の人たちが分け隔てなく集まる。

町の将来について共通した認識が持てれば障壁は打破できると考えられる。

4. 多世代共創的活動は人々の意識にどのような変化をもたらすか？そのような意識変化は持続可能な社会の実現にとってどのような含意があるか？

多世代共創のイメージとして今後増加する高齢者層を如何に支えるかに話題が行きがちであるが、絵屏風の聞き取り調査を通じて、一番影響を受けて変わったのは学生である。社会の断層である昭和 30 年代より前の暮らしは、今の 70 代以上に聞いて記録に残しておかない限り永遠に消滅してしまう。

湯河原町においても新幹線開通のためにトンネルを掘った土を大量に使って大規模な埋め立てや田畑をつぶして住宅地にした。町そのものの形が大きく変わったのであるが、昭和 30 年代以降の大量生産・消費の時代とそれ以前ではどちらが持続可能社会化は明らかである。

その意味においても多世代共創的活動によって、温故知新を図ることが重要である。

## 5. 研究開発実施体制

### (1) 研究代表者およびその率いるグループ

①渡辺賢治（慶應義塾大学環境情報学部 渡辺賢治）

#### ②実施項目

1. 未病概念の構築と普及
2. 未病チェックシートを用いたライフログアプリ開発
3. 多世代コミュニティ形成のアプリ開発
4. 多世代共創コミュニティ形成研究拠点設立と多世代共創コミュニティの事例調査
5. 未病対策健康講座の開催
6. 歩きたくなるまちづくり形成と温泉を活用したウォーキングプログラム開発
7. 成果の評価と実装に向けた仕組み作り

### (2) 要介護度進展予防の仕組みづくりグループ

①大磯 義一郎（浜松医科大学医学部、教授）

#### ②実施項目

1. 地域の問題点・ニーズの深掘調査 2) 住民の保健ボランティア活動への意識調査ならびに高齢者の生活状況の調査、4) 要介護度と社会的因子・精神的因子との因果関係の調査
2. 脳・身体機能研究拠点の設立と新規評価法の構築
3. 未病対策健康講座の開催
4. 要介護度進展の予測および介入・評価
5. 医療福祉介護機関ネットワークの構築
6. 成果の評価と実装に向けた仕組み作り

### (3) 多世代共創コミュニティ形成グループ

①飯盛 義徳（慶應義塾大学総合政策学部、教授）

#### ②実施項目

1. 地域の問題点・ニーズの深掘調査 1) 地域におけるコミュニティの現状調査
2. 多世代共創コミュニティ形成研究拠点設立と多世代共創コミュニティの事例調査
3. 住民の学び合いワークショップ開催と住民リーダー・地域ボランティア育成
4. 交流の場・機会の形成とコミュニティ・コーディネーター育成
5. 歩きたくなるまちづくり形成と温泉を活用したウォーキングプログラム開発
6. 成果の評価と実装に向けた仕組み作り

### (4) 住民学び合い活動開発グループ

①井上 真智子（浜松医科大学医学部、教授）

#### ②実施項目

1. 地域の課題調査 1) 地域におけるコミュニティの現状調査。2) 住民の保健ボランティア活動への意識調査ならびに高齢者の生活状況の調査、3) 医療介護福祉連携の課題に関する調査
2. 未病対策健康講座の開催
3. 多世代共創コミュニティ形成研究拠点設立と多世代共創コミュニティの事例調査
4. 住民の学び合いワークショップ開催と住民リーダー・地域ボランティア育成
5. 交流の場・機会の形成とコミュニティ・コーディネーター育成
6. 医療福祉介護機関ネットワークの構築
7. 成果の評価と実装に向けた仕組み作り

**(5) 温泉活用地域活性化グループ**

①大和田 瑞乃 ((株)アセンダント 代表取締役)

②実施項目

1. 多世代共創コミュニティ形成研究拠点の設立と多世代健康診断の実施
2. 温泉活用による未病への効能の科学的データ収集と解析
3. 温泉活用に向けて継続して協力できる施術者等、地域人材の発掘と育成
4. 成果の評価と実装に向けた仕組み作り

## 6. 研究開発実施者

### (1) 研究代表者およびその率いるグループ

氏名	フリガナ	所属	役職 (身分)
渡辺賢治	ワタナベ ケンジ	慶應義塾大学環境情報学部	教授
秋山美紀	アキヤマ ミキ	慶應義塾大学環境情報学部	准教授
大和田瑞乃	オオワダ ミズノ	(株)アセンダント	代表取締役
大磯義一郎	オオイソ ギイチロウ	浜松医科大学	教授
井上真智子	イノウエ マチコ	浜松医科大学	教授
葉山茂一	ハヤマ シゲカズ	漢方デスク	社長

### (2) 要介護度進展予防の仕組みづくりグループ

氏名	フリガナ	所属	役職 (身分)
大磯義一郎	オオイソ ギイチロウ	浜松医科大学医学部	医学部
長田勲	オサダ イサオ	湯河原町福祉部	福祉部
浅田一彦	アサダ カズヒコ	湯河原町福祉部介護課	福祉部介護課
宮下徹也	ミヤシタ テツヤ	横浜市立大学医学部	医学部
藤田卓仙	フジタ タカノリ	名古屋大学大学院経済学研究科	大学院経済学研究科

### (3) 多世代共創コミュニティ形成グループ

氏名	フリガナ	所属	役職 (身分)
飯盛義徳	イサガイ ヨシノリ	慶應義塾大学総合政策学部	教授
坂倉杏介	サカクラ キョウスケ	慶應義塾大学グローバルセキュリティ 研究所	講師
上田洋平	ウエダ ヨウヘイ	滋賀県立大学地域共生センター	助教

山田 貴子	ヤマダ タカコ	慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科	特任助教（非常勤）
伴 英美子	バン エミコ	慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科	特任講師（非常勤）
井上真智子	イノウエ マチコ	浜松医科大学地域家庭医療学講座	教授
内藤善文	ナイトウ ヨシフミ	湯河原町地域政策課	課長

#### （４）住民学び合い活動開発グループ

氏名	フリガナ	所属	役職 (身分)
井上真智子	イノウエ マチコ	浜松医科大学地域家庭医療学講座	教授
綱分信二	ツナワキ シンジ	菊川市家庭医療センター	指導医
渡邊奈穂	ワタナベ ナホ	東京慈恵会医科大学医学部看護学科	助教
青木拓也	アオキ タクヤ	北足立生協診療所・東京医科歯科大学大学院医療政策学修士課程	副所長・ 修士院生
芦野朱	アシノ アカネ	王子生協病院	事務

#### （５）温泉活用地域活性化グループ

氏名	フリガナ	所属	役職 (身分)
大和田瑞乃	オオワダ ミズノ	(株)アセンダント	代表取締役
弘田量二	ヒロタ リョウジ	高知大学 教育研究部 医療学系 連携医学部門	講師
杉森賢司	スギモリ ケンジ	東邦大学 医学部 生物学教室	講師
松浦一弘	マツウラ カズヒロ	(株)アセンダント	技術開発担当
渡辺 賢治	ワタナベ ケンジ	慶應義塾大学環境情報学部	教授

## 7. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

### 7-1. シンポジウム等

年月日	名称	場所	参加人数	概要
平成 28 年 11 月 5 日	ゆがわら多世代ふれあ いイベント タイムマシンパーク	湯河原町民 体育館	100 名	多世代のふれあいを目的とした イベントを開催。I 部. ビンゴ ゲーム大会『湯河原の昔へ GO!』II 部. ゆがわら多世代ふ れあい劇場の 2 部編成。
平成 28 年 11 月 13 日	ゆがわらっことつくる 多世代の居場所オープ ンハウス	ゆがわらっ ことつくる 多世代の居 場所（神奈 川県足柄下 郡湯河原町 中央 3-2- 11)	82 名	湯河原町役場町長や、教育長、 湯河原町内の区長、一般住民な どを招き、ゆがわらっことつくる 多世代の居場所のオープニン グセレモニー（テープカット、 餅投げ等）およびオープンハウ スを実施した。
平成 28 年 11 月 19 日	KEIO UNIVERSITY SFC OPEN RESEARCH FORUM 2016 セッション番号 S-19【地域を持続可能 にする未病への取り組 み～多世代共創の 「場」のデザイン～】	東京ミッド タウン・タ ワー4F カン ファレンス ROOM 5	50 名	多世代が交流する仕組みである 「ゆがわらっことつくる多世代 の居場所」や 「湯河原版ふるさと絵屏風」プ ロジェクト、「多世代の関係と 生きがい・健康の関係」につい ての調査研究を公開セッション の形式にて紹介した。
平成 29 年 1 月 25 日	湯河原版ふるさと絵屏 風 除幕式・内覧会	湯河原町立 図書館 4 階会議室	100 名	2015 年 10 月頃より湯河原町と の共催の下、湯河原町各区会、 湯河原町各老人クラブ、湯河原 美術協会の協力により作成され た湯河原版ふるさと絵屏風の除 幕式・内覧会を実施した。
H29 年 3 月 6 日	RISTEX 公開シンポジウ ム「多世代共創による 持続可能な地域社会の 実現に向けて」	時事会館ホ ール		持続可能な多世代共創社会のデ ザイン」研究開発領域でのシン ポジウムにて、ポスター賞を受 賞した。

## 7-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

### (1) 書籍、DVD

なし

### (2) ウェブサイト及び SNS アカウント等構築・運営

- ・ フェイスブック「ゆがわらっことつくる多世代の居場」  
<https://www.facebook.com/yugawara.tasedainoibasho/>  
2016年5月立ち上げ、日々の活動の様子を掲載。

### (3) 学会 (7-4. 参照) 以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

- ・ シンポジウム等の名称、演題、年月日、場所

## 7-3. 論文発表

### (1) 査読付き (0件)

●国内誌 (0件)

●国際誌 (0件)

### (2) 査読なし (0件)

## 7-4. 口頭発表 (国際学会発表及び主要な国内学会発表)

### (1) 招待講演 (国内会議 0件、国際会議 0件)

### (2) 口頭発表 (国内会議 5件、国際会議 0件)

- ・ 青木拓也 (京都大学)、井上真智子 (浜松医科大学)。患者経験に基づくプライマリ・ケアの質と女性の癌検診受診との関連。第7回日本プライマリ・ケア連合学会、東京、2017年6月12日
- ・ 馬場皓大 (浜松医科大学医学部医学科)、「認知症高齢者の正確な精神・身体状況を把握するための調査方法の検討」、第66回日本病院学会、いわて県民情報交流センターアイーナ、2016年5月
- ・ 井上綾香 (浜松医科大学医学部医学科)、「介護施設者に適する介護御進展評価法の提言」、第66回日本病院学会、いわて県民情報交流センターアイーナ、2016年5月
- ・ 寺澤美晴 (浜松医科大学医学部医学科)、「高齢者の交通手段から検討する外出行動と健康」、第75回日本公衆衛生学総会、グランフロント大阪、2016年10月
- ・ 小澤由季 (浜松医科大学医学部医学科)、「多世代共創プロジェクトに対する要介護者への適応性の評価と参加者増加に向けた検討」、第75回日本公衆衛生学総会、グランフロント大阪、2016年10月

### (3) ポスター発表 (国内会議 3件、国際会議 0件)

- ・ 伴英美子・井上真智子・渡辺賢治 (2016)「多世代関係と生きがいの関連についての研究 -湯河原町住民調査より-」(第7回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会 プログラム・抄録集 P.363), 日本プライマリ・ケア連合学会, 台東区民会館・東京都立産業貿易センター台東館, 2016. 6. 12
- ・ 渡邊奈穂 (東京慈恵会医科大学)、岡崎研太郎 (名古屋大学)、蓮行 (劇団衛星/京都外国語大学)、渡辺賢治 (慶應義塾大学)、井上真智子 (浜松医科大学)。「未病に

取り組むまちづくり」に向けた多世代演劇ワークショップにおける参加者の体験に関する質的研究、第 7 回日本プライマリ・ケア連合学会、東京、2017 年 6 月 12 日

- ・ 青木拓也（京都大学）、井上真智子（浜松医科大学）。Comprehensive Primary Care is Associated with Better Health Literacy in Japanese People: A Population-based Study. 44th North American Primary Care Research Group Meeting, Colorado, 2016 年 11 月 12 日

## 7-5. 新聞報道・投稿、受賞等

### (1) 新聞報道・投稿 (11件)

- ・ 神奈川新聞 平成 28 年 11 月 2 日「世代を超えて交流深めよう、湯河原でイベント「タイムマシン・パーク」
- ・ タウンニュース 平成 28 年 11 月 4 日「ゆがわら多世代ふれあいイベント 5 日（土）タイムマシン・パーク」
- ・ タウンニュース 平成 28 年 11 月 4 日 「慶応大が湯河原の住宅地に「多世代の居場所」
- ・ 湯河原新聞 平成 28 年 11 月 8 日「5 日、多世代 100 名が参加し 未病劇やビンゴゲーム楽しむ」
- ・ 湯河原新聞 平成 29 年 1 月 26 日「「湯河原ふるさと絵屏風」が完成 町立図書館で序幕・内覧会」
- ・ 相豆新聞 12198 号「湯河原ふるさと絵屏風」完成「過去を育み未来を創る」多世代交流で未病に貢献
- ・ 神静民法 平成 29 年 1 月 26 日「懐かしの湯河原を屏風に 記憶集め絵画で表現 慶応大が聞き取り」
- ・ 箱根・湯河原・真鶴タウンニュース 2017 年 1 月 27 日「昭和の湯河原びっしり屏風 町民から情報募り作画」
- ・ 毎日新聞 平成 29 年 1 月 26 日 ふるさと絵屏風：昭和 30 年代の湯河原描く 完成、町立図書館で除幕 / 神奈川
- ・ 朝日新聞 平成 29 年 2 月 2 日朝刊 昭和の湯河原、絵屏風に 慶大が企画、地域の物語継承 / 神奈川県
- ・ タウンニュース「町民がタイムスリッパー昔の湯河原町を劇で再現」平成 28 年 11 月 18 日掲載

### (2) 受賞 (0件)

### (3) その他 (\_\_\_\_件)

## 7-6. 知財出願

### (1) 国内出願 (0件)